

漢詩

野戦高射砲第六十四大隊

岳川 石田久喜

バブアニューギニア
巴布亜新基尼大戦慰霊碑竣工賦奉 二首

力闘南浜地。死屍横密林。

力闘南浜ノ地。死屍密林ニ横ハル。

一碑悠頌。報國畫忠心。

一碑悠久ニ頌ス。報國畫忠ノ心。

又

椰樹亭亭古戰場。当年布陣跡茫茫

椰樹亭亭古戰場。当年布陣ノ跡茫茫。

王師十萬終黃土。留取忠魂耀國光。

王師十萬ニ黃土トナリ。忠魂ヲ留取シテ
國光ヲアラス。

会報

建碑・収骨・巡拝報告号

《No.11》

陸・海・空・東部ニューギニア戦友会

ウエワク慰霊公園建設 協力事業の完結について

東部ニューギニア戦友会代表世話人 田中兼五郎

九月十六日、ウエワク地方は朝から抜けるような晴天で暑い暑い日でありました。この日は新生バブア・ニューギニア国及び東セビツ州の独立記念の日であります。この吉日を選んで、かねて工事中のウエワク慰霊公園の竣工除幕式がとり行なわれました。これにより昨五十五年末以来東部ニューギニア戦友会の会員のみならず絶大な御協力をいただいております。ここに事業の経過と竣工除幕式の概要その他を報告して心からのお礼に代えたいと存じます。

(一) 事業経過の概要

昨五十五年末建設協力のための事務を開始しました時点における厚生省からの当戦友会に対する協力依頼事業は野外音楽堂（ステージとバックスクリーン）と休憩所の二つでありましたので約一、三〇〇万円を目標として募金運動を開始したのであります。

ところがみなさまの熱烈な御協力により、全部隊それぞれの目標を達成されたうえ、さらに超過応募していただいた部隊が多く、本年五月ごろの時点における判断では、厚生省に対してさらに数百万円分の追加協力をして差し支えないのではないかと考えられるに至りました。

そこで各部隊戦友会世話人のみなさま、厚生省、工事担当の会社等と調整の結果、新たに慰霊碑の付属設備として灯籠、卒塔婆立て、焼香台の三つを、また休憩所のなかにニューギニアの地図（銅板）を設置献納することにいたしました。

工事の設計は菊竹建築設計事務所、施工は箱根植木株式会社であります。心誠意事に当たっていただきました。このようにして竣工しました慰霊公園の写真にはお礼として慰霊公園の写真を差し上げることになりました。

(二) 九月十六日の除幕式及び慰霊祭

この日はまず午前十時半から厚生省主催による竣工式及び追悼式が行なわれ、ついで戦友会主催の慰霊祭を行ないました。

前者の代表は厚生省の政務次官大石千八氏でありましたが、日本側参列者は政府職員のほか御遺族及び戦友合計約七十人であり、現地側からは前バブア・ニューギニア国首相ソマール氏、現外務大臣レビ氏、東セベツク州首相ダンブイ氏等が列席していただき厳粛に行なわれました。申すまでもなく宗教色は一切ありませんが、天皇、皇后両陛下よりの御献花がひときわあざやかに列席者の目に映りました。

この式で私が東部ニューギニア戦友会及び日本バブア・ニューギニア友好協会を代表して慰霊碑に捧げました追悼の辞は別掲のとおりであります。

戦友会主催の慰霊祭はそのあとで、戦友及び御遺族によって仏式で心をこめて行なわれました。まず、戦友及び遺族が日本から持参した種々のお供物を碑前にあふれる程積み上げた後、型どおり慰霊の辞、焼香と続き、最後は「海行かば」の斉唱をもって終了しました。

この慰霊祭で私が東部ニューギニア戦友会代表として、また滋賀さんが海軍東部ニューギニア戦友会長として碑前に捧げた慰霊の辞は別掲のとおりであります。

なお、戦友及び御遺族が碑前に供えられたお供物は式後すべて、周囲に多数集まってわれわれの慰霊祭を見物していた現地住民諸氏にお分けしました。

(三) その他

(一) 今回現地を感じました重要なことの一つは、慰霊公園の敷地が昭和五十一年当時候補になっていたウオム岬でなくてほんところによかつたということでありました。

ウオム岬には、今回の旅行でウエワク到着の九月十四日午後行つて見ました。私が昭和四十四年の遺骨収集に参りました当時豪州側の手で建設されていた記念碑公園は立派になっていました。しかし、ここは飽くまで勝者の記念碑の地でありまして、もし仮にその近くにわれわれの亡き戦友の慰霊碑が建てられたとしたら、その結果はあまりにも亡き戦友に対してあわれみというか、申しわけないということになったと考えられます。

それに比し、今回実際に建設された場所はウオム岬と全然関係がないばかりか、飛行場からもホテルからも交通の便のよい一等地でありまして、亡き戦友に対して申しわけが立つように感じました。

(二) 今回竣工しました慰霊公園の今後の維持管理については日本及びバブア・ニューギニア両国政府間の取り決めて万全を期せられることと思えます。ただし今回私が現地を感じましたところでは、周囲の植樹がまだ十分でないようであり、また野外音楽堂の夜間照明

設備も必要ではないかと思いました。
 このような問題解決のための経費は勿論ブ
 ア・ニューギニアにお願いするわけにはま
 いりません。日本政府としても、今後の調整
 の問題ではあります、あるいは出しにくい
 といわれるかも知れません。そのような場合
 われわれも絶大な努力をもって協力して折角
 つくり上げたこの慰霊公園をさらに良くする
 ために今一步の協力ということもわれわれの
 頭のなかの何処かにとどめておかなければな
 らぬ問題のように感じました。

(三)次に、これはウエワクの慰霊公園とは別
 の問題ではありますが、各部隊戦友会の世話
 人会で議題の一つにしておりましたマダンの
 ヤボブの慰霊碑の問題について報告します。
 ウエワクからの帰途、九月十八日午後マダ
 ンに立ち寄り、梶塚氏及び後藤氏とともにマ
 ダンの州庁に州首相のバト・バルサン氏及び
 州計画官のピーター・コルトン氏を訪問し、
 ヤボブの木碑を永久的なものにしたいので認
 可してくれと申し入れました。

これに対し州首相は即座にOKを出し、そ
 のうえ、折角新しいものをつくるなら立派な
 ものにしてくれとのことでありました。
 ポートモレスビー政庁との調整が必要なよ
 うですから、なお若干の時日が必要かと思
 いますがこの問題もあまり遠くない将来に実現
 しなければならぬと思われまます。なお、
 この件の経費について世話人会では約五十万
 円ということになっておりましたが、先述の
 州首相の一言が現在の私にとつては心の重荷
 になっておりまして、少なくともその倍額約
 一〇〇万円が必要ではないかと考えておりま
 す。

(四)今年、慰霊公園建設協力と併行して、
 東部ニューギニア地域の遺骨収集についても
 厚生省に協力しました。
 期間は八月二十三日から九月十日まで、地
 域はブナ、ギルワ及びサラモアでありました。

ブナ、ギルワには歩兵第四十一連隊戦友会か
 ら七名、サラモアには歩兵第一〇二連隊から
 三名参加していただきました。
 東部ニューギニア戦友会としては、前例に
 従い各人に十萬円づつの応援を行ない、また
 出発時の壮行会、帰還時のお出迎えを実施し
 ました。
 両地域の合計収骨数は一二〇体であります
 が、各地域ごとの行動の詳細はそれぞれの班
 の御報告を御覧下さい。

以上で概要の報告を終わりますが、終りに重
 ねて募金に応じていただきました戦友のみな
 さまと、竣工除幕式に御参列いただきました
 戦友及び御遺族に心からのお礼を申し上げた
 いと存じます。
 実のところ私は、今回の募金は、昭和四十
 八年の遺骨収集のための募金のときお約束し
 ていた「これが最後です」を破つての重ねて
 の多額の募金でありましたので、果してみな
 さまの御協力が得られるかどうかをあやぶん
 でおりました。ところが、各部隊戦友会世話
 人各位のお話によりまして、みなさまには慰
 霊碑のためならばと熱誠をもって御協力をい
 ただき、その結果として募金目標をはるかに
 超え、意を尽した追加協力事業を行ないう
 るようになったのでありまして、私はここにみ
 なさまの御高志に対し衷心敬意と謝意を表
 する次第であります。ほんとうに有り難うご
 ざいました。
 また、除幕式参列のためわざわざウエワク
 までお出でいただいた戦友と御遺族のみなさ
 まには格別のお礼を申し上げます。ならばぬ
 と存じます。出費も多額なうえに団体旅行の
 不自由を忍んでの御行動、嘸かし御苦勞であ
 ったことと存じます。しかしお蔭により除幕
 式と慰霊祭とを盛大にさせていただきました、戦
 友もお喜びのことと拝察します。どうも有り
 難うございました。
 終り



慰霊祭当日



ウエワク戦没者慰霊墓苑

連隊会に参加して

第20師団 歩兵第78連隊

齋藤 顯

昭和五十六年三月十五日(日)午前十時羽
 田を發つて、福岡市西区姪浜清楽寺境内で午
 後一時から行われた、歩兵第78連隊の慰霊祭
 並に南区で行われた懇親会に参加した。
 我歩兵第78連隊はその衛戍地であった朝鮮
 京成竜山を失った関係で、終戦迄連隊の営庭
 に厳然としてあった「忠魂碑」が今は無く、
 昭和四十八年四月、九州地区の戦友が中心と
 なり、特に終戦の際東部ニューギニア、カイ
 ヤン附近の山中で軍旗を奉焼した時の連隊旗
 手徳丸勝美氏の御尽力により、朝鮮に近い此
 の地に「歩兵第七十八連隊英霊碑」が建立さ
 れて今日に至り、数年毎に福岡で連隊会が開
 催されている。

碑石は、歩兵の本領萬朶の桜を表して桜ミ
 カゲが使われ高さ2米70、徳山石の3米30四
 方の台座の上に厳としてあり、又碑の文字は
 先年亡くなられたが最後の連隊長松本松次郎
 陸軍少将の筆になっている。
 飛行機の到着時間の関係で少し遅れて参列
 したが、此の英霊碑前に於ける慰霊祭は厳肅
 且つ盛大に執行され、約100名の参加戦友、遺
 族全員が個々に歩を進めて拝礼し、焼香を行
 い国家のために散華された歩七八の英霊に対
 し敬弔のまことを捧げた。

大正五年四月十八日宮中に於て軍旗を親授
 されてからの我連隊は、国土防衛の第一線に
 つき、昭和二十年八月迄の僅か三十年間の短
 い歴史ながら、第二十師団の精鋭として鮮満
 国境事変、満州事変、支那事変その他の事変
 には常に初動に於て出動の任を果たしたが、
 今次大東亜戦争に於ては東部ニューギニアの
 戦斗に参加し、特にアイタペ作戦では97%の
 損害を受ける等多くの戦友を失い、終戦後浦

追悼の辞

東部ニューギニア戦友会
日本パプア・ニューギニア友好協会

代表 田中兼五郎

本日ここに、パプア・ニューギニア国及び東セビツク州独立の日を卜して、過ぐる第二次世界大戦におけるニューギニア作戦中最後のはげしい戦いの行なわれたこのウエワクの地において、戦没者慰霊碑の竣工及び追悼の式典が行なわれるにあたり、東部ニューギニア戦友会及び日本パプア・ニューギニア友好協会を代表して追悼の辞を述べますことは、まことに感慨の深いものがあります。

われわれ東部ニューギニア戦友会員及び日本パプア・ニューギニア友好協会会員にとつてこの慰霊碑の建立は、われわれが昭和四十四年以來三回にわたつて厚生省に協力して実施して来た東部ニューギニア地域の遺骨収集の最後をしめくくる事業として、また東部ニューギニアの戦没英霊が永久に眠られるであろうパプア・ニューギニアの地の住民の各位との友好親善を志して努力して来た日本パプア・ニューギニア友好協会の各種事業のなかの重要な一つとして多年の念願でありました。その慰霊碑建立が日本政府によつて昭和五十五年度事業として取り上げられ、ここに竣工を見るに至りましたことはまことに意義深いものがあります。これに関連して私が十二万の英霊に対します報告しなければならぬと思ひますのは、日本政府、特に厚生省及び外務省の多年にわたる御努力の結果、ここに始めて公式にニューギニア慰霊碑が実現したというところであります。いままでは他の地域に比べておくれが目立ち、英霊の各位にはさぞかしおさびしいことであつたであろうと拝察しておりましたが、いま除幕されましたこの慰霊碑をどうぞ御覧いただきまして、政府と、生

存戦友達の英霊に捧げるまごころをお汲みとりたいと存じます。

次に報告しなければなりませんのは、パプア・ニューギニア政府及び東セビツク州政府におかれては、ウエワクの一等地、文化センター地域の一部分を慰霊碑建立の地として御提供いただいたほか、建立作業の万般にわたり御協力いただいたのであります。

われわれ東部ニューギニア戦友会員及び日本パプア・ニューギニア友好協会一同は、昨五十五年厚生省からのお呼びかけに応じて慰霊碑建立事業に全力をもつて協力することになりました。慰霊碑建立は、申すまでもなく碑そのものが最重要ではありますが、ウエワクのそれは、現地との友好親善、文化協力、平和祈願の意をもこめて全体として平和公園的なものにするという日本政府の計画にしたがい、われわれ戦友会及び友好協会は慰霊碑の付属施設のほかに現地の人々との友好親善、文化協力に役立つ施設の建設を担当させていただきました。現地との友好親善が、もともと英霊各位の御遺志でありましたことは、われわれのよく知つてるところであります。またみなさまのための慰霊碑が現地の方々の温い雰囲気の中に未長く維持されてほしいというわれわれの念願からでもありました。われわれ戦友会員及び友好協会の慰霊碑建立事業に対する協力の主旨は、以上のとおりでありまして、われわれはこの実現のため、最大の努力を振り絞つたつもりであります。実際の設計、施工を担当していただきました菊竹建築設計事務所及び箱根植木株式会社におかれても、われわれの主旨に賛同して

精神をこめて事にあたつていただきました。いまやその工成り除幕式がとり行なわれた次第であります。われわれはこの慰霊公園を中心として未長く慰霊と現地との友好親善の歩みが続けて参りたいと期しております。英霊の各位、どうかわれわれの微衷をお汲みとり下さい。そして安らかに眠り下さい。昭和五十六年九月十六日



慰霊祭当日両陛下の献花

「東部ニューギニア戦線」を
書いた「出した」良かつた
鈴木正己

「今のうちに、将来のため、書き残しておこう」という、福家さんの主唱に賛同して、素人の私の拙稿が本になつて、五千部も世に出盛大な出版記念会まで開いていただき私に就つては正に一世一代の感激であつた。戦誌刊行会のご努力で、日経他十指に余る紙誌に、好意的な書評もいただき、戦友知己はじめ全員多くの方々から続々とお心の籠つたお便りが寄せられ、殊にご遺族の方々によるこんでいた、けたのは何よりの喜であつた。

賀に復員したものは、連隊の総数四、九九六名中僅かに一二二名であつた。同期生も四名中三名が戦死し、数多くの先輩と戦友が戦没し祀られているこの英霊碑に對し深い黙禱を行つた。あの膨大な連隊の営庭を埋め尽した殆んど完全な歩兵一個連隊の將兵、又大正時代からの多くの戦没將兵が、いま一基の英霊碑に置きかえられているのである。そして現在の日本がこれら数多くの英霊を基礎として其の上に築かれたものである事を思う時、誠に感慨無量であつた。

後段の南区横手にある清水苑に於ける戦友会では、生き残つた若い者の努めとして行つてゐる歩兵第78連隊史編纂の中間報告と現在東部ニューギニア戦友会が実施している「ウエワク慰霊公園建設協力のための募金要領」について説明、協力をお願いし、懇親会に於ては朝鮮の見習士官当時以来の戦友、或いは言語に絶する苦勞を共にしたニューギニアの戦友と久し振りに語らい時間の経過を忘れて懇談した。

七時過ぎ実り多かつた連隊会の意義を噛みしめつ、同行して昼間太宰府その他をお詣りした妻の待つ博多の宿に向つた。

翌朝、福岡市内を観光して長崎に至り、雲仙から熊本と回遊し、熊本では同期の親友と久闊を辞し、熊本空港から帰路についた。去る昭和五十二年春、宮崎市で行われた連隊会では、その参加を機会に今回と同様に大分、宮崎、鹿児島を廻り、今度の連隊会を中心にした北西九州旅行とでも、もつて老年夫婦の九州一周は概成したと思つてゐる。

私にすら本が出せたのである。稀有で貴重なご体験を持つ、東部ニューギニア戦友の皆様、奮つてご体験を出版され、未だに知られざる戦場、東部ニューギニアの苛烈極限な戦況を後世に伝え遺そうではありませぬか。私がお引鉄になれば望外の幸です。

以上

慰霊の辞

東部ニューギニア戦友会代表 田中兼五郎

本日ここに日本政府企画によるニューギニア慰霊碑の竣工式がとり行なわれた機会に、その式典に参列の東部ニューギニア戦友会員及び遺族があらためて碑前に集い、慰霊祭を行ないますにあたり謹んで慰霊の辞を申し上げます。

英霊のみなさま、昭和二十年戦い終つてわれわれ残存の東部ニューギニア作戦参加陸海空軍部隊将兵約一万一千が、このウエワク沖のムシユ島を去つて内地に復員してから早くも三十六年近くの歳月が経過しました。しかしわれわれにとつて今なお忘れ難いのは三年という長い期間にわたつた東部ニューギニアでの難戦苦戦の思い出と、作戦参加将兵約十四万のうち実に十二万にものぼつた亡き戦友とであります。

実に東部ニューギニア戦線は、南太平洋方面におけるガダルカナル島に続く日本対連合軍の決戦場となりました。作戦は昭和十七年八月に始まり、まずオーウエンスタンレー山脈越えのポートモレスビーに対する陸路攻撃、次いでブナ、ギルワの防衛戦、さらに昭和十八年のラエ、サラモア防衛戦、フィンシユハーフエン地区の作戦、マダン南方地区の作戦と続ききました。この間悲劇的なサラワケット越え退却及びガリ転進もあり損害の多発は避け得ませんでした。昭和十九年春、第十八軍等の東部ニューギニア作戦部隊は西部ニューギニアに転進することとなり、ラム、セピツク両河の下流地帯を強行西進中、四月二十二日連合軍のアイタベ、ホールランジャ上陸となり、東部ニューギニアの地域に孤立することになったのであります。しかし諸部隊の士

気いささかも衰えず、拳軍一体、乾坤一擲、軍の主力をもつて七月坂東河畔においてマツカーサー軍に決戦を求め西部ニューギニア方面友軍の危急に応じたのであります。その結果損害は甚大、軍としての戦力はほとんど底をついたのであります。しかしやがて、同年末ごろ米軍と交代した豪軍がアイタベを基地として、山南、ブーツ、ウエワク方面に來攻するや、軍は文字どおり最後の力を振り絞つて邀撃作戦を敢行し、山南複廓及びセピツク地帯において玉碎寸前にして終戦を迎えたのであります。その三年という長期にわたる激戦の連続、しかもそのいづれもが連合軍の圧倒的に優勢な航空勢力の下、後方からの補給がほとんどないという最悪の条件に堪えての必死敢斗は、大東亜戦争の他の戦場には比類を絶する例として、今なお万人にたたえられているところであります。われわれは、この作戦間、あるいは敵弾にたおられ、あるいは病いに、あるいは飢えに死せられた十二万の英霊のみなさまの在りし日の姿を今ここにあざやかに想い起し、その真摯敢斗の御精神に対し心からの敬仰のまことを捧げるものであります。

それにして内地復員後のわれわれにとつていつも心から離れなかつたのは、みなさまの御霊となきがらがいまだうなつていられるであろうかという問題でありました。それは一つには、時が経つにしたがつて却つて紛糾する靖国神社の問題に対する焦慮からであり、また一つには、日清、日露の両役や支那事変初期においては戦没者の遺骨は丁重に御遺族の許に届けられたのと異なり、大東亜戦争に

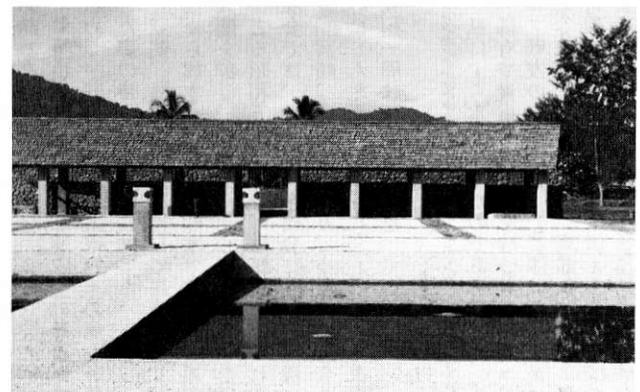
おいては敗戦の結果遂に戦没者のなきがらの大部分を戦場に放置したま、復員せざるを得なかつたことに対する無念と申しわけなきから出たものであります。そのため、戦友相会しては幾度となくこのことを語り合い、また戦友打ちそろつて靖国神社、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にお参りしてみなさまに対するお慰めの勤めに欠けることなきよう心がけて参りました。やがて昭和四十年代に入りましてからは、進んで東部ニューギニアの現地での遺骨収集を思い立ち、厚生省に協力して昭和四十四年、四十八年、五十六年の三回にわたつてこれを実施いたしました。また、この間、御遺族を加えて現地への慰霊巡拝も度しげく行なわれるようになったのであります。

遺骨収集や慰霊巡拝の際には現地で必らず慰霊行事を行なつてはおりますが、その祭壇はすべて臨時のもの場限りのものであり、われわれとしてはなにか永久的で公的な施設を希望せざるを得ませんでした。この度、日本及びバプア・ニューギニア両国政府の御高配により、みなさまと最も縁の深いこのウエワクの地に公的な慰霊碑が建立されましたことは誠に喜ばしい次第であります。

今後といえども東部ニューギニアの慰霊巡拝は、東はミルン湾のラビから西はアイタベに至るまで広がつての激戦場をたずねて行なわれることでありましよう。そしてまた、そのときどきの慰霊行事はその地で行なわれるであります。しかし東部ニューギニア地域としてのまとまつた慰霊行事は本日ここに竣工しました。この慰霊碑を中心として行なわれることになると思います。英霊のみなさま、そのときにはどうか、東はラビ、西はホールランジャ、サルミから、甚だ遠路ではありますすが天かけつてお出でいただき、われわれ戦友と遺族の慰霊のまことをお受け取り下さい。

石塚卓二 定価1600円 送料250円
推薦図書紹介
 ニューギニア東部最前線
 ●病兵大軍団出撃せよ
 ●スケッチと文で兵士が記録した猛兵団の最期
 なんとたる無謀―予備調査もなく、いきなり地獄の島に投棄された14万の猛兵団に襲いかかる飢餓・悪病・近代装備の敵。野草・トカゲ・蛇・カエルを食いつくした兵士の一部は遂に天皇の兵器を原住民の食料と交換する。ジャングルを埋めつくす死を待つだけの病兵の大群に、同胞の殺し合いまで発生した昭和20年7月、安達司令官は「餓死を待つより敵中に玉砕せよ」と山南戦出撃を怒号する―奇蹟的に生還した兵士が描く誰も書かなかつた魔の戦場の秘話。

▼書店売切の節は、書店に注文するか
 代金同封で本社か
 東京都千代田区塚崎1-4-5 1401 叢文社
 電話29510159 振替東京9142714
 ▼直接著者へ
 〒656 宝塚市中山校台1-5-11
 石塚卓二 0797890586



慰霊公園の中・休所

追悼の辞

海軍東部ニューギニア戦友会 代表 滋賀秀正

南溟の果て、東部ニューギニアの戦場に散華した英霊に謹んで申し上げます。

ニューギニア本土最後の決戦の地ウエワクに、此の度、東部ニューギニアで亡くなられた彼我両軍戦士の霊をお慰めし、その遺勳を讃え、且つ世界の平和を祈念する慰霊碑と、併せてパプア・ニューギニア国民の一層の文

化向上と、心の憩いの場としての平和公園とが、パプア・ニューギニア政府の深く温い御理解のもとで、日本政府と、ニューギニア本土と深い係りのある私共陸海軍の戦友、それに日本パプア・ニューギニア友好協会が真に一体となつての協力により、茲に立派に完成を見て、私共永年の念願を果し得たことを報告出来まことは、誠に同慶に堪えません。

私共は39年前祖國への忠誠心にもえて、万里の波濤を越え、赤道直下のパプア・ニューギニアに勇躍進出して参りましたが、連合軍の反撃愈々激しさを増し、ミッドウェイ海域に敗れ、ガダルカナル島の戦線を失い、戦場は逐次ニューギニア本土の東部に移つて参りました。

斯くして、私共海軍部隊は、ミルン湾のラビにブナに、ラエ、サラモアに、フィンシュハーフエンに、アイタベ、ホーランチャに、ウエワク、カイルリ島、ムシユ島、山南地区等に於て、寡兵よく連合軍と戈を交えました

が、到るところで苦斗を強いられ、連合軍の航空機、艦艇の跳梁下、補給は全く杜絶し、昼なお暗いジャングルの中での戦いは、それこそ壯絶悲壯なものでした。骨と皮とに瘦せ衰えた兵士が渾身の力を絞つての戦いでした。然しニューギニアに封じ込められた私共は最

後迄祖國日本の反攻を信じて、極限の中でありながら身を挺しての攻撃を繰返したのでした。そして多大の犠牲を払い、精も根も尽き果てた中で、1945年8月15日の終戦を迎えました。

戦後私共は、一時も貴方達を忘れることなく、毎年靖国神社の杜に集い、貴方達の霊を懇ろに御慰め申上げております。又嘗ての戦場に代表を派遣し、水漬く或は草むす御遺骨を御収めして、故國に御迎えすると共に、慰霊巡拝を幾度か行つてまいりました。

然し私共の心の隅になお残るものがあり、それはこの地ウエワクに慰霊碑を建立することでした。この永年に亘る悲願が、本日茲に実ることが出来ました。

在天の英霊よ、どうか私共の志を御受取りさい。戦後私共は、貴方達の尊い犠牲に報いるべく、祖國日本の復興に身を粉にして尽力してまいりました。戦後30有余年、今や我國の政治経済の基盤漸く安定し、世界の大国に伍して平和と繁栄への道を進みつ、あります。そして私共は今後共世界平和の確立と、世界の一層の繁栄を念願して、全力を尽くす所存であります。

最後に、不幸な戦争の場としてではなく、此の度は平和と幸福の場として、此の地を提供して下さつたパプア・ニューギニアの皆様

に、厚く感謝の意を表し、その将来の発展と繁栄を、心から御祈り申上げると共に、友好親善、文化交流、将又経済協力と、幅広く私共の力が役立つことを念願致します。緑濃く、水あくまでも青き此処ニューギニ

アの地に眠る懐かしき英霊よ、私共のこの念願に絶えざる御加護を垂れ給え。而して、永遠に安らかな眠りに就かれんことを御祈り申上げて、慰霊の辞と致します。合掌
一九八一年九月十六日
パプア・ニューギニア国独立記念日に際し。

支払金内訳

科目	摘要	支払金額
共計		17,279,800-
設計料	TEL料	120,379-
材料代	印刷、コピー	303,130-
その他	送別会費	132,010-
送別会費	その他送別費用	517,490-
手数料	送金手数料	43,545-
補助	取骨団10、補助	480-
補助	取骨促進協議会年会費2件	1,300,000-
補助	靖国神社へ年賀と献燈料	10,000-
補助	ウエワク建碑除幕式用品他	12,000-
補助	除幕式費用	50,280-
補助	贈品の梱包材料等	1,660-
計		19,770,774-

収支報告 東部ニューギニア戦友会

自昭和56年1月 至昭和56年10月末

収入金額	科目	摘要	支払金額
1,289,619-	繰越金	55年より繰越残金	
20,904,505-	応募金	建碑事業協力応募金	
155,455-	雑収入	預金金利 他	
		事業費及び諸経費支出	19,770,774-
		預金在高	2,578,805-
22,349,579-	合計		22,349,579-

ウエワク慰霊墓苑建設協力応募金大別表

部隊大別	要請額	応募額	備考	部隊大別	要請額	応募額	備考
18軍司令部	740,000-	1,060,000-		船舶工兵会	320,000-	548,000-	5、9
20師団会	1,650,000-	1,650,000-	各部隊	27貨物廠	240,000-	601,000-	
41師団会	950,000-	950,000-	長野県下を除く各部隊	44兵站会	300,000-	300,000-	
51師団会	1,650,000-	1,650,000-	各部隊	揚陸、防給水	400,000-	638,000-	1、3、揚、23、25、給水
航空部隊会	1,370,000-	1,370,000-	航空各部隊	患輸、兵器		116,000-	所属不明を含む
海軍部隊会	1,510,000-	2,812,000-	海軍各部隊	自、廠、5 D 他			
高射砲各隊	320,000-	2,806,950-	防航空、機砲、50、56、61、62、63、64、65、66	長野ニューギニア会	15550,000-	1,550,000-	自39、239i
照空各隊	200,000-	648,000-	4-1、1.2、3.4、中隊会	高知ニューギニア会	120,000-	120,000-	144i 他
道路隊各隊	400,000-	432,000-	38、44、48	広島ニューギニア会		100,000-	41 i
軍通信隊	300,000-	300,000-		富山ニューギニア会		135,100-	
水勸各隊	210,000-	275,000-	17、18、19	日、パ友好協会	1,000,000-	1,000,000-	日本パプア・ニューギニア友協会
兵站病院	330,000-	701,000-	90、112、117、123	計		20,904,505-	
迫撃21会	140,000-	231,790-					
独立工兵各隊	800,000-	909,660-	8、15、30、33、36、37				

慰霊公園竣工—その後に来るもの

四一D二三八 梶塚喜久雄

(日本PNG友好協会専務理事)

昭和56年9月16日 PNGウエワクの一等地、まさに白砂青松ともいえる景観の中に、私も関係者の待望久しかった慰霊公園：現地側では、これを平和公園と呼ぶ：が、その木の香も新らしく完成し、両国官民多数参列のもとに、御遺族代表の手によって除幕された。

この日たまたまPNG並びに東セビツ州の独立記念日でもあった関係上、この慰霊公園の東隣りのチアールズ記念広場は、早朝というのに州内各地から馳せ参じた群衆が埋め尽くしていた。そしてダムブイ州首相、ソマレ前総理、レビ外相を始めとするPNG側VIP、さらにたまたま慰霊公園除幕のため訪問中の大石厚生政務次官、仙石日本大使、戦友会並びに日本PNG友好協会を代表する田中將軍等日本側VIP等の着席とともに、独立を寿ぐ祝典が盛大に行われ、引き続いてこの日一日中多彩な慶祝行事が展開されたのである。

やがて午前10時30分、独立記念祝典に参列した両国貴賓等の来臨を俟って日本政府による慰霊公園竣工式並びに追悼式、続いて東部ニューギニア戦友会による慰霊祭が厳粛盛會裡に滞りなく行われたのである。

この朝のウエワクは、青く晴れ渡って雲一つない南国の強い陽ざしで、気温も35℃〜40℃とまさに饅上り、この慰霊公園内礼拝堂にPNG戦線各地から今日の日を目指して馳せ参じたでありました英霊の熱氣を想わせるものが、礼拝堂前のコンクリートの上に居並ぶ参会者も齊しくこの熱氣にあおられて流れ出る汗と、感激の涙で濡れそぼり、炎熱下に従容として散華した英霊を弔う儀式とし

てまことに相応しかった。
さて悲願ともいへば現地慰霊碑が、幾多の迂余曲折を経るとにかく茲にようやく完成した。一人の生存者として、これまでに漕ぎつけた日本政府関係者並びにPNG側関係者に対する深い謝意を表したい。特に東セビツ州首相チエルビン・ダムブイ氏の本計画に對する深い理解と決断に對しては、如何にして謝意を表すべきか、形容する言葉もない。ただこの時期に最高の人を得たことは、たしかに英霊の御加護というべく、これが感謝と首相自身に對し深甚の敬意と謝意を表したい。
慰霊碑は、たしかに出来た。しかしこれこそ終りではなく、戦友会が考えなくてはならないいくつかの問題が始まる。その問題点の中から私は、次の三点を強調して諸兄の御理解と御協力を期待して止まない。

即ちその一は、今後におけるこれが維持管理の問題である。幸いこの問題については、日本政府からPNG政府最終的には東セビツ州政府に對し、一定額の維持管理費を提供して行こう旨を聞いて一応の安堵感を持つことが出来たが、それだけで足りるかどうか。
そもそもこの慰霊碑は、形式的には、その碑文にも見られるとおり、必ずしもわが軍の戦争犠牲者のみを対象とせず、広く全犠牲者を思ふ形になっているが、今にしてそれは当然であり、そうしなければいけない時代になったことは、素直に首肯出来るのである。
しかし、日本国政府を始め、関係御遺族、戦友会の誰もが、その実質は、私達の犠牲者を弔い、追悼するための合同墓苑が出来たものとして理解している筈である。

かつての日、昭和30年日本政府がPNG内各地に建立した慰霊碑が、やがて消えてなくなったり、あるいは、何時の間にか名も無い野草に埋もれてしまった実例を承知しているだけに、今度こそ（そうしてはならない）氣持で一ぱいである。従つてたとえ維持管理の費用をPNG側に渡すからといって、そのみに頼ることは許されない。むしろ積極的に我々自身の手で、あらゆる機会を捉えて、維持する努力が必要であろう。多くの諸兄の共感を得たいものである。
その二として、さて折角慰霊碑を建立してもこれを訪れ、香華を手向けお詣りする人を絶やしては、相済まない心境である。
「仏造つて魂入れず」的な結果を招来することのないよう努めたいものである。
しかしながら、宇宙時代到来によってPNGも近くなったとはいふものの、航空運賃を始めとする諸事情は、必ずしも容易に訪れることの出来ない遠い国である。
これがため、私も日本PNG友好協会としては、日本政府関係当局に對する不断の働きかけは、もとより、PNG政府特にニューギニア国営航空に對して、日本とPNG間の航空事情の緩和策実現のため積極的な働きかけを継続しているのであるが、これこそより多くの皆様の御協力なくしては、実現困難な問題である。これまた御協力を期待して止まない。
そしてその三番目に思う。それは生存戦友の大部分は、齡既に六十路を越え、いわば老境に到達し、近い将来消えてゆく宿命に在る。しかし、彼の地に散華した英魂は、不滅である。
今こそ百年先の方途を画さなければ、悔を千載に残すことになり兼ねない。
その意味において、私は、関係者の子から孫へそして永遠への橋を架け残すことが、生き残つて帰還した我々の責任であることを痛感し、たまらない焦燥感を禁じ得ないものである。

「小泉恭次―追悼録」
天津駐屯歩兵隊長、歩兵十六連隊長、近歩一連隊長、第一旅団長等々を歴任された小泉中将は、敗戦の責を負つて自決、同中将が関係した濟南事変、カンチャイノ島事件を詳述。
A5版一三六頁

「隊史編纂刊行の手引」
隊史の編さんをはじめられる向に、當会が経験者、専門家の意見に基づいて編集した分りやすいマニュアルです。
B6版七一頁 価三五〇円

近刊案内
悪夢のニューギニア戦を体験した著者は、復員直後の病床で子孫にだけでも、と書き綴つたのが本書である、当時の生々しい記録、感動、涙が三十余年の空白を越えて彷彿と甦る。
星野一雄著 五十七年一月下旬刊

隊史、戦誌、自伝伝記 編集出版
戦誌刊行会
〒105 東京都港区西新橋一―五―一
山引ビル 代表幹事 福家豊
TEL 〇三―五八〇―八六三〇
〇三―四九九―三三三〇

過般、犠牲者の遺児諸君によって「二世會」が誕生したときは、まさに（わが意を得たり）の心境で、大いに協力してその発展を期待したのであるが、一部の諸君の努力だけで飛躍的な発展は、望むべくもなく、大きく団結するまでに至っていないことは、まことに残念である。
戦友会が後事を托すため、必ずしも二世會という組織でなくとも良いから、不滅の英魂を末代までお慰めするための後継者育成に立ち上るべき時であると思う。まさに戦友會活動の新しい始まりではないだろうか。

東部ニューギニア慰霊巡拝団報告

第一班の案内を終えて

野砲二六 松尾嘉次郎

ヤミールの久保大隊には高射砲部隊の鉄木大尉(中隊長)日高軍医少尉小野少尉岩永本庄系井君等特に他部隊の方々が戦死されておられ昭和十九年一月頃マダン高射砲陣地に敵の大爆撃があり壊滅的被害と多数の戦死傷者を出されその負傷者と同じ病棟で過し又同年四月中旬頃ハンサの高射砲陣地の下を通り敵機撃墜四十九機その勇猛果敢な戦斗ぶりには畏敬の念をいだいて加えてヤミールの隊の多くの戦没者の慰霊は終生の念願でした。

慰霊公園建設の作業員参加を申しましたところ、標題の案内役を仰せつかり三十七名の御遺族に同行し、御満足のいく戦況説明が出来るかどうか心許ないありさまでしたが厚生省小島操団長、高野実班長の周到な配慮と準備及計画により無事に巡拝を終えてこの会報を通じて鈴木大尉を初め多くの御遺族の方々にニューギニアの砂と御挨拶が出来たようになられたと戦友会々々長、戦友会代表世話人、戦友会事務局、日バ友好協会専務理事様第一回標記案内者平井和雄様に心から感謝申し上げます。ウエワクホテルにて山下支配人を交え厚生省日程表を調整した後の行動は左記のとおりでした。

- 二月二十六日 福岡ホテル・リッチ集合 結団式
- 二月二十七日 福岡空港発、ポートモレ スピー着
- 二月二十八日 ポートモレスビー発 ウエワク着。戦況全般説明、及洋展台、松の岬行。
- 三月一日 ポイキン慰霊(私を含め七名にて約一軒南の兵站病院跡地川原にて) ブーツ慰霊(右ポイキン

を除き) 団長、班長、山下支配人案内
 三月二日 午前中、山南「ウリガンビ」にて合同慰霊祭

三月三日 「アイトベ」へ飛行機で二十一名(バロン、サルブ、マルジツプ、アイトベ沖海上、アイトベ四名、アフア二名、ピアク二名、西部ニューギニア七名)移動後慰霊

「ウエワク」桜森兵站病院跡地にて慰霊(アイトベ以外の残り十六名、団長、山下支配人、私。
 三月四日 「ウエワク」からポートモレスビーへ移動。
 三月五日 「ポートモレスビー」から福岡空港へ。

参加者 男十七名、女二十名
 県別には福岡、長崎、熊本、山口、三重、兵庫、大阪、栃木、群馬、千葉、神奈川、岩手、各一名香川、岐阜、京都、福井各二名、愛知、茨城、富山各三名埼玉、岡山各四名。参加者はいづれも立派な方々ばかりで遺族会々々長、社長、校長、大学理事担当者、町議会議員、兄弟、子息、学院長、町婦人部長、戦没者ご婦人の方々でした。

戦況全般説明では事前に野砲二十六連隊史作成資料(フィンシユ・ハーフェン第一期作戦)をタイプし配布したほか戦史叢書によりました。戦場の場面としてはアイトベ作戦において当初歩兵七十八連隊本部へ派遣された砲兵連絡掛の行動(本部が所定の位置につくや友軍砲兵の砲撃を聞き敵の砲弾が近くに落ちるようになってから数分間)爾後終始川東大隊長の許にあつて見聞した三宅歩兵団長の陣頭指揮振り、敵の掩蓋機関銃まで十四、五米の左岸水中に待機する田中隊、川東大隊長

から砲兵射撃の要求があり戦友の死かばねを踏み越えて小林砲兵中隊(中隊長負傷していた)に連絡(残念ながら弾丸を撃ちつくして)川東大隊に戻るかと歩兵中隊の攻撃が始つていた。機関銃陣地奪取後なおも追いつける「ヤーツ」という敢斗声、そして壮烈な戦死をされた突撃中隊長の御遺族、中隊の御遺族に立派でしたよと叫びたかつた。

時間もないので以上を要約して歩兵中隊が勇敢に敵掩蓋機関銃に突込んで行き、追いつめる「ヤーツ」というかん声を、そして全軍あげての激闘だったことを申しあげました。その後胸に熱いものがこみあげ全般説明として三十六分の短いものとなりました。

ポイキン及ウエワク桜森兵站病院の案内については割愛し山南「ウリガンビ」で慰霊の際参加の御遺族から「こんな山の中で何をしていたのですか」との素朴な質問があり無理からぬこと、思いました。ミラク攻撃の例やヤミールの戦斗の一場面を説明しました。言葉につまったとき沖繩戦の先輩が「草いきれ」と硝煙の中草いきれが出ないとき助けてくれた。

戦後筆舌につくしがたい苦難な道をのり越え巡拝前後お便りを戴き涙を新にし又健気な日本婦道を見て勇気づけられましたことを感謝申し上げ戦没者のみ霊のとこしえに安らかならこと、御遺族に御加護を賜わらんことを祈念しつ、終ります。

東部ニューギニア慰霊巡拝に同行して

第二班 八〇連隊 江口幸雄

昭和五十六年二月二十七日金曜日午前九時五十分巡拝団一行を乗せたニューギニア国営航空のポイキング七〇七型式は粉雪舞う福岡空港を後に一路ポートモレスビーに向け飛び立ちました。今回の巡拝は厚生省主催にて全岡からの集合の為、前日福岡のホテルリッチ博多に集合し結団式注意事項その他必要なことがらはすべて終了していました。特に九州には珍らしく寒さの厳しい朝でした。

私は第二班の随行者です。遺族は男二名女七名中、妻五名。敗戦後三十余年の風雪に耐えて来られた元氣な姿に接し嬉し限りすてにみんなの人が六十才前後青春時代もなくほんとうに御苦勞様でした。

昨日迄の寒さのせいで特に暑い! やっぱりニューギニアなので。予定通り翌二十八日巡拝の日を過ぎて参りました。ラエの旧海軍病院跡地にはまだ新しい卒塔婆が建つていました。単独にて巡拝されたのでしょうか。

ラエのマーケットにてタロ芋を買い、夕食に供したところ(味付せず塩のみ)とても美味に當てを思っていた。タロ芋が充分にあつたかの質問には残念ながら無い日が多かつたと答えました。

フィンシハーヘンに於て慰霊碑の前で政府主催の慰霊祭を挙げる。みんなして草をとり国旗を掲げ、花を供え、持参の酒タバコ菓子その他いろいろの品を供える。此処カムロアの地に建立の慰霊碑については現地住民の管理も行き届いており、親日家の村長以下心からよくつくして頂いている様子が、はつきりわかりました。草取りの途中から子供、大人も全員協力旗竿の為竹をとってくる様たのんだところ直径十糎以上の竹を取ってくるありさま!!プロクイングリッシュが半分通じた為でした。椰子の実もたくさんサービスしてもらつた。政府側の追悼の辞(厚生省第二班長高木達郎氏)遺族代表山本さくさんが追悼の辞を朗読するうちあちこちからむせび泣きが聞えて参りました。今迄耐えてきた積年の想がこゝに至つて堰を切つた様に大きくかわりました。私も三十八年前多くの散華した戦友を思い出と共に泣き出して居りました。

フィンシハーヘンはラエからの日帰りの為四時半飛行場へ。十五人乗の小型機、機上遙か彼方雲間にサラワケットを見る。中野集団のサラワケット越さざかしと思われた。

翌三月四日モレスビー集結の為ナザブ飛行場へ向う。ナザブは草原地帯見渡すかぎり草原

戦斗中敵落下傘部隊が降下したのも、ナザブでした。これにて随行の任務は終了。マイクロボスの中、責任を果した解放感も手伝っていつしか歌を口づさむ「あ、あ、堂々の輸送船 さらば故国よ栄あれ」みんながよく歌ったものだった!! 「花摘む野辺に日は落ちて誰か故郷を想わざる いつしかみんなの合唱するところとなる。或人はしづかに眼頭を押える。遺族の心を打つものがあつたのでしよう。

同行を終り今回の巡拝は遺族の方々に心底から感謝して頂きました。特に团长以下厚生省の方々には満腔の謝意を表したい。

無き夫、兄弟の眠る異国の地に親しく赴き、新たな決意のもと一つの区切りがついたとの感想を寄せて頂きました。この想出を新に今後は強く元気に生きて行くとの事。ほんとうにこの慰霊巡拝の持つ意味は実に大きいものがあると痛感致しました。

今回の遺族の中には親の参加はなかつた。行きたい人もあつた筈、しかし高令にて断念したと思われまふ。又今回のこの巡拝を知らなかつた遺族も多かつた様に思われまふ。今後十年も経てば更に高令化します。出来る事ならなるべく早い時期に予算の許す限り再度御計画あらん事を今回の選にもれた遺族にかわり御願申し上げます。

昭和五十六年東部ニューギニア地域慰霊巡拝団第三班説明員として参加報告

第三班 鶴飼義信

広船船工兵第五連隊第三中隊長

当初親友高知県本山町々長今西戦友が参加の予定であつたが町政上都合が悪くなり、高知ニューギニア会長永野氏及代表世話人田中兼五郎氏と話し合いの結果私が代行することになった。私は早速厚生省に連絡し、第三班の参加遺族を知らせてもらい、関係英霊のわかつていること柄を知らせてもらう為全員に紙を出した。

参加者は次の通りである。

(1)公文卓(長男) 高知県香美土佐山田町

公文泉 一七・八・二七・戦死 ミウレ

(2)岡本利子(妻) 大阪府高槻市深沢町二一

岡本初太郎一七・二二・二二・戦死ギルワ

(3)坂井サツヨ(姉) 広島市中区吉島西二七七八

坂井勝志 一八・一・八・戦死ギルワ

(4)速田塚スエノ(妻) 宮崎県あびの市大字杉水流

速目塚常雄一八・一・一九・ギルワ

(5)梅木茂利聡(四男) 及びの市大字杉水流

梅木栄次 一八・一・二七・クムシ川口

(6)監物カネ(妹) 栃木県宇都宮市戸笠二四二四

監物平七 一八・一・二二 プナ

(7)三橋良一(兄) 埼玉県入間郡日高町馬引沢

三橋平作 一八・一・二二 プナ

(8)原豊秋 厚生省

(9)宮田清 添乗員

(10)鶴飼義信(戦友) 徳島県板野郡吉野町柳原

公文君は補瀬部隊、岡本君は独工十五、坂井君は四一連隊、速目塚、梅木君は曉、水上、陸上勤務隊、監物君は監物大隊長三橋君は安田部隊所属とそれぞれ解つた。ギルワ、プナ、クムシ川は戦争当時私も共に戦つた場所であり、部隊の戦歴、戦場の実相もわかつており、四十八年収骨に行った所でもあり、説明は充分出来ると思つた。戦記類を十月余り復習したが、南十字星、防衛庁戦史室の戦記、田中兼五郎の近著、私の書いた戦場から抜粋して説明資料とし、私の体験、当時の心境を交えて慰霊に徹し、英霊の犠牲がむだでなかつたと言つて自信、誇りをもてるよう説明することに心がけた。

(1) 慰霊行の概要

八年ぶりのモレスビー・スタンレー山越しの飛行、クムシ川が見えプナが見えて来ると胸があつくなり、ひとり涙が流れる。ラミントンホテルは昔と変わりなく懐かしい。早朝、か高い鳥の音が目覚め、戦時中、収骨時の朝を思う。三月一日はコゴダにゆき、数軒前進して、前回三体の遺骨を収骨した場所近く部落で公文泉君等の慰霊式を行う。私は追悼文をよみ、皆はじめての祭りにどうこくする。五四年戦友阿部氏等がつくつた記念碑がコゴダの見晴台に建っている。仲々立派なものである。この、現住民から阿部氏へのプレゼントをあづかる。まことに心うるわしい民間外交である。夜当地出身の政府要人オガチ氏、ポボレデター市長マルク氏外二名来訪を受け懇談する。二日ゴナ・バサアにゆく。バサアは十七年七月二十一日私が横山先導部隊をはじめ上陸をした思い出の地であり、その当日多数の部下の戦死負傷者を出した悲しい土地である。四十四年収骨の時建てた木碑は腐朽してくずれおちている。横山部隊辻本氏達が五十二年慰霊に来た折りのソトバを立て、梅木君等の霊をとむろう。我が中隊戦友山村君の遺族から託された弔慰文を読む。涙と汗で全身ずぶぬれになる。岡本さんは独立十五のソトバと懐しい御主人を追憶するのかわき入っている。皆どうしてこう涙が出るのであろう。午後は「ギルワ」にゆく。こ、には四十四年収骨の折建てた記念碑と五十二年に高知県知事が捧げた銅板碑がある。この管理清掃等カプラハンボ部部落内で意見のくいちがいがあり、当日も大分ごたごたした。幸い高知の大野戦友よりのメッセーヂ、宮田添乗員、原厚生省氏等の努力で碑前で思い出に残る慰霊が出来た。岡本、坂井、速目塚さんにゆつくり、当時を話してあげ心ゆくまでみたまど話しが出来なかつたのは心残りである。

三月三日監物、三橋両君の慰霊と合同慰霊祭を行う為、プナにゆく。こ、では先行の原君が酋長と円満な話し合いがつき、三十年建てた吉田元首相揮ごうの記念碑の前で盛大な合同慰霊祭を行う。全員よりの捧げもの、国から又県知事からの花環など、特に女の方の遺族があるので飾りつけも結構出来、厳肅な立派な式典をあげることが出来た。原君の弔辞、主人を失つた岡本さんの素直なそしてしつかりした代表弔文、速目塚さんの主人によびかける言葉、監物さん、坂井さん、三橋さんとそれぞれかたりかけられ、公文君の準備した真言の経文が一層荘厳さを深める。私は舟艇を秘していた吊橋川ギルワをすぐ近くに見て言葉もなく立ちつくした。五十五年六月からの「プナ」から高知に留学しているモンチー君の妻子に会い、私の孫達からのプレゼントを贈る等楽しい一日であつた。無事任務を果たすがすがしき一杯である。

推薦図書

「一死、大罪を謝す」 角田房子著
帝国陸軍の典型的軍人として平凡な道を歩いていた阿南惟幾は、その生涯最後の四ヶ月突然、歴史舞台の中央に引き出された。

巨大な組織の統率者として敗戦へ向う過程で彼は何を考え、何を為そうとしたのか。一切を語らず自決した軍人、阿南の行動を緻密に追いつながら、歴史の事実として捉えた帝国陸軍の台頭と、崩壊の日。
価一、二〇〇円 送料二五〇円
〒160 東京都新宿区矢来町七一
新潮社

「大東亜補給戦」

大本営兵站総監部参謀 陸大兵学教官・元陸軍大佐 中原茂敏著
内外の困難な情勢下において、心血を注いで新技術の開発、生産の増強、補給の円滑化を図り戦局の打開に努めた各種の体験を基礎に数多くの文献、資料の収集整理、分析により当時の戦局及び国力を詳細に評価し論述した多くの教訓を学びとる好個の書であると同時に他に得難き珠玉の労作である。
〒160 東京都新宿区 一一二五一一三
原書房

ニューギニア慰霊巡拝の記

元飛行第二四八連隊長 黒田武文

此の度ババア・ニューギニアのウエワク国立公園の一角、千五百坪の敷地に日本政府が日本庭園を造成した上慰霊碑を建立し、又関係部隊で寄金を據出して休憩所と野外音楽堂を建設することとなり、昭和五十六年七月末完成予定の日に合せて、ラバウルニューギニア陸軍航空部隊会の十ヶ部隊(戦隊五、飛大二、航通二、野戦気象一)の有志は去る八月十六日より二十四日迄の日程により、御遺族十名のお供をして総勢三十六名で現地慰霊巡拝に行つて参りました。但し工事は諸般の事情により、日本式には運ばず遅れに遅れて九月中旬完成見込みとなり、新ウエワク慰霊碑の前で英霊の御魂をお慰め申し上げる事が出来なかつたのが甚だ残念でございました。

八月十六日十一時十五分成田空港発、香港、マニラ經由十七日早朝ポートモレスビー着、国内線に乗換えて正午頃ウエワク着、その午後にはポーラム岬(通称アベ岬)で、嘗て遺骨収集の際遺骨を茶毘に付してその残灰を埋葬した場所に建立した慰霊碑の前で、万感をこめて各部隊合同の慰霊祭を執り行い、心より英霊の御冥福をお祈りして多年の念願を果し些かながら肩の荷を卸したような心地でございませう。此の慰霊碑周辺はよく掃除が行き届いており、後方には数多くの新旧の卒塔婆が立てられており、現地慰霊に来拝者の多い事が察せられました、有難いことです。聞けばウエワクホテルの山下支配人が清掃の奉仕をして下さっている由、その心意気の崇高にして清純なるに感動しました。周囲に集まる現地人も静粛にして神妙、私共の心を察しているかの様です。御遺族の皆様を初め戦友一同の涙も天に届いて、英霊も快よく感応された事でありませう。その後第六飛行師団司令部跡の洋展台に於いて米豪軍上陸進攻の際の防衛戦斗に就いて、日本ババア・ニューギ

ニア友好協会の榎塚専務理事の講話あり、往時の苦斗を回想しました。望見する松ノ岬・ウエワク港、ウエワク半島、オーム岬、ムツシユ島、カイリル島何れも激戦の跡、痛恨の地でありまして、洋展台の周辺にはまだ砲弾等がごろごろしている由、正に心の痛手に触れる様でございませう。次でウエワク国立公園に至り、日本庭園と慰霊碑堂屋、休憩所、池等工事の現場を見学しました。箱根植木の土田技師や粕谷氏の説明を聞き、現地人の仕事ぶりや思わぬ湧水の為難工事となり苦心の数々を知りましたが、一日も早く完成して英霊安住の地とならん事を切に願わずにはおられませんでした。このウエワク国立公園は平和公園として、運動場や博物館等を含む壮大な構想で計画されたもので、我が慰霊堂は休憩所と共に概成されたものに、屋根を葺いている所でした。献花台も概成されその壁面に現地の貝等を塗り込んであるのが印象的でした。碑は三本建ての形で中央が日本語、右側に英文、左側にビジン語の碑文を刻した銅板を取付けるとの事、祭神は第十八軍関係者で西イリアン方面ビアク、ソロン、ホーランジャ地区等の戦没者も総て包括するとの事でございませう。

高戦友会の申し出により堂屋正面入口の池畔左右両側には燈籠を配し、堂屋の右側には卒塔婆立てや遺骨残灰の埋葬場所も設けられます。政府主催の除幕式及び戦友会主催の慰霊祭は既に九月十六日と予定されており、施設の維持管理は日本政府の出資により現地政府が管理の任に当り、ウエワクホテル山下支配人が現地奉仕すると云う至れり尽せりの措置には、在天の英霊も快よく照覧され明かに感応される事でございませう。夜は午後七時三十分より近畿ニューギニア会の皆さんと合流して、大の親日家で禪の研究者でもある東セビツク州のダンブイ首相等数十名を招待

して懇親パーティを実施し、夫々昔覚えた現地語や片語の英語で楽し交歓しました。翌十八日より各部隊毎に関係方面、即ちブーツ、ポイキン、ソナム、オグナル、バニモ等に別れて現地慰霊祭を執り行いました。西部ニューギニアに縁故の深い飛六三、飛二四八、白城子飛団、二航通の私共は御遺族四名のお供をして総勢八名、ダグラス双発機で約一時間二十分西部国境に近いバニモに飛び、卒塔婆を立て造花や供物を供えて現地慰霊祭を執り行いました。遠く南溟の涯で炎熱瘴癘の地に悪戦苦斗の末、昭和十九年四月二十二日ホーランジャその他の地区に米豪軍が上陸進攻した後の死の行軍、武器なく食なく、マラリヤと下痢に悩まされながらの言語に絶する悲惨な状況は今尚険に新らたで、全滅状態と認められて八月二十日には現地復帰とて多くの部隊は解散消滅し正に棄児的存在、陣歿者の慟哭の声耳たぶを打つが如く、申し訳なさに胸を掻きまわされる思いでございませう。最も心残りと思われたでありませう御遺族の苦難の来し方を偲び、容易ならざる行く方を案ずれば感極まりて言葉もありません。然しながら遙か故国にありましては、全土の廢墟の中から今日世界第二の経済大国と謂われる程の復興を成し遂げました。之れ偏えに国の為命を捧げて護国の大任を果された英霊の厚い御加護の賜でありまして、心より感謝申し上げますと共に永く後世にその御遺徳を顕彰すべき覚悟を新たにした次第であります。機上より遙かに望むホーランジャのフンポルト湾、頂上を雲に隠したクロップ山、雲間には平和の壮厳さを象徴しているようであります。

往復のダグラス機で離着陸の操作を除いて殆んど全航程の操作を副操縦席に塔乗した竹村氏に任せると云うほ、えまじい事があり、パイロットの好意と信頼もさることながらその襟度の大きいには一驚を喫しました。正午過ぎウエワク帰着後は飛六三や他の皆さんと同行し、飛六三の旧宿営地を訪れ、戦後

移住して来た人々に温かく迎えられ懐しい椰子の実を御馳走になりました。更に現地自活の当時お世話になった部落シュインボを訪れ、酋長にお礼の品々を進呈し、酋長も亦よく人名を覚えていて感激の光景を呈しました。翌十九日も引続き各地区に別れましたが、私共二十二名はウエワク南方約百料のチンプンケを訪れ現地人墓碑に詣りました。ニューギニアで唯一の事件のあつた所で日本人として初めての参詣との事深々と拝礼しました。チンプンケはダンブイ首相の出身地で首相自ら先に立つて歓待の行事を進められ、セビツク河水害の説明や生家に案内されて御両親に挨拶したりしました。公会堂で部落の代表五十数名と一人一人握手して交歓しましたが、此の建物は女人禁制との事。日本女性には特別に入室を許されましたが、周囲の溝に人の形を彫刻した丸木橋のある出入口がありこの橋は踏んではならないと云う事でその小溝を跨いで出入りしました。風俗習慣の違いの厳しいのに驚くと共にお互いに理解する為には細心の注意が必要である事を痛感しました。チンプンケに至る道は最初の約五十料マイクログラスで約一時間三十分はジャングルを切り拓いた山腹道、次の約五十料約一時間三十分は大草原の連続でその壮大な景観を満喫しました。途中に気象観測所があり、牛と馬の放牧各一ヶ所を望見して民度の向上を知りました。飛六三や野戦気象の皆さん七名は更にセビツク河を約一時間舟行しタンバナムに赴き一泊の上小学校を訪れかねて姉妹校として絵画を交換していた御遺族植田教諭は更に親交を深め一同も歌唱等で歓迎されました。立派な国民外交として親善の深い根をおろされているのは誠に敬服に堪えませぬ。

八月二十日も各地区に別れましたが、私共十八名は四一飛大の皆さんの案内で松ノ岬に至り現地慰霊祭を行い、当時を偲んで飯盒炊事で昼食。又旧日本軍の高射砲が錆止めされて据え付けた儘になっており、ウエワク空港(旧東飛行場)の一隅に残骸を止める三式戦

と九七重の発動機と共に、往時の激烈なる戦斗を思ひ更に英霊の御冥福を心よりお祈り申し上げました。珠に海岸に出て一生懸命員を拾う御遺族の祈るような後姿には思わず熱いものがこみ上げて参りました。夜は午後七時三十分より再びダンブイ首相等をお招きお別れパーティを実施しましたが、全員楽しく打ち解け手品で喝采を拍したり、美声を披露する物続出、首相も自ら「若者の悲恋」の民謡を披露される等大変盛会でした。

八月二十一日ウエワクに別れる日が参りました。私共空中慰霊班七名内御遺族二名は九時ウエワク空港出発、マダン、アレキシス上空に於いて飛二四八村岡隊長を初め空中散華の英霊の御冥福を祈り、更にワウ飛行場上空に於いては飛十一佐藤中尉の為空中慰霊、御遺族を操縦席に招待し高度を下げ翼を傾けて協力してくれたパイロットには感謝の外ありませんでした。ポートモレスビー空港到着

待機中、青年海外協力隊の佐孝君に遭い、海軍出身の父の意向によりマダンに既に一年滞留して建設省の仕事に従事又折を見ては慰霊碑の清掃を心掛けていた由、異国で頼もしい青年に会い父子共に立派、誠に意を強くしました。その後ポートモレスビーに一泊。香港に二泊して八月二十四日全員無事帰国致しました。御遺族には八十一才と七十才の高令婦人も参加しておられましたがお元気で帰えりになり何よりの幸せでした。何処に行つても「日本人はナンバーワン」と云つて歓迎され朝の道路で遭う人毎に「グッドモーニング」と挨拶される等昔に変わらぬ純朴なる人心。清く高い空、飽く迄碧い海、はては大ジャング

ル大草原の千古の緑を湛えた悠久なる大自然。敬虔なる御遺族や戦友の姿。誠に終生忘れ得ぬ心洗われる感激の旅でございました。

この日程を無事終了出来たのは綿密なる計画によること大でしたが、更に各人がよく健康管理に留意され団体行動に快よく協力されましたからで、又添乗員の須永氏や松本氏の献身的なお世話と事に当つての適切な処置、

平川団長の細心の心くばりと先々の指導事項、樫塚専務理事と大西通訳の官庁関係に対する円滑な連絡、その上ウエワクホテル山下支配人の格別の好意による何処へでも自動車を運

今日に会う

元第四航空軍司令部 近藤又一郎

先日、慰霊巡拝から帰られた原智恵さんから巡拝のお話を聞きました。原さんの満足と喜びの思いが、私のむねをうち、何か一筆さしていた、きたいような気持ちにかられました。原さんは飛行第五十九戦隊故原武大尉のご母堂です。原さん達がブーツにつかれた八月十八日が丁度原大尉が同地の上空で散華されたその日にあつておりました。

昭和十八年八月の頃この付近は彼我航空決戦の焦点となつておりました。私は十五・十六の両日延べ八十機をもって敵フアア飛行場に、三たび進攻しかのりの戦果をあげました。これに対し、敵は十六日夜、数回にわたり、それぞれ一乃至数機をもつてウエワク・ブーツ地区を爆撃した後、十七日朝から数十機をもつて来襲し、我に相当な損害が生じました。翌十八日朝は小雨でしたが、我は飛行第五十九戦隊の九機を含む戦斗機二十三機を飛行

転して連れて行つてくれる等積極的協力のおかげであり、皆善意の積み重ねによるものでありまして、心から感謝申し上げる次第でございます。

終

場上空に配置し、敵を迎え撃つ態勢をとりました。果然八時二十分、百機を越す敵が数方向から侵入し、飛行場、宿营地及び港周辺を強襲しました。彼我の空中戦、敵の超低空攻撃、高々度爆撃及び我が対空砲火の炸裂により、周辺一帯はげしい戦火に包まれました。わが数十隊は劣勢よく果敢に攻撃し、敵十九機を撃墜しましたがわが方も自爆二、大破一の結果となりました。

原大尉の日記は八月十六日を最後に、以下空白となつております。二十三才の若武者が最期に残したかった言葉は何だったでしょうか、父母への訣別とお礼の一ことだったかも知れません。今三十八年を経て、当月当日、その地に母の巡拝をうけた英霊の本懐察するに余りあります。更めてみたまの安らかに鎮まりましたまわんことをお祈り致します。

慰霊巡拝行

三月二日午後パプア・ニューギニア、ウエワクポーラム岬の炎天下政府建立の慰霊碑の前で厚生省の小島巡拝団長に続き遺族代表大楠ツチエ氏の追悼文がしめやかに奉読され巡拝団員一同思いを新に肉親戦友のありし日の面影をしのび深い感激にひたつていた。

思えば昭和十七年三月堀井南海支隊がラエサラモアを攻略ポートモレスビーを眼下に見ながら無念の撤退を余儀なくされて以来第一

小幡惣兵衛

八軍の二〇、四一、五一の三ヶ師団に海軍部隊その他で約一四万の日本軍が終始悲惨な戦斗を強いられたこの東部ニューギニア。それは長さ千二百軒日本の面積の二倍人口二百六十万、大湿地帯の横たわる海岸地帯を除いては三―五千に及ぶ氷河をいたたく山脈、マリアヤ等に苦しめられ行軍力のみには頼れない、こうした状況の中で山岳戦大機動戦が戦われたのであった。砲爆撃に加え疲労

と飢とに落伍した兵士が高床式の民家の床下や沿道に累々と屍をさらしたと戦史に残されているとのことである。そしてウエワク南部のツル山(標高二千米)周辺山岳地に最終拠点を構えた時は全軍僅か二万八千うち四分の三が病兵であつたという。一四万の兵力中一二万七千六百柱が終戦時僅に一万三千名を数えるに過ぎなかつた。安達軍司令官も跡を追ひ自決將兵等しく此の地に散り果てたのであつた。二月二十八日ウエワク到着以来その付近、ポイキン、ブーツ、ウエワク南部山岳地一部の人々はアイタベ等の戦跡を往時の戦友で案内役松尾喜次郎元大尉の胸に迫る戦況の説明をききつつ夫々の地点で携行した線香燭米嗜好品等を供え思いも新に冥福を祈つた。そして今此の地で今回の最大行事の合同慰霊祭が挙行されてきた。式典は参加各県代表の焼香に移つていた。

用意して行つた「ニューギニア方面福井県戦没者二四〇九柱之霊」と記した位牌、福井県知事、県遺族連合会長、所属の福井市遺族連合会長の花輪も供えさせていただいた。団員一同各県毎にうやうやしく心からの焼香をすませた。式場はもうもうと香の煙につつまれ一同感慨に眼頭を抑えていた。周囲には現地人の大人子供が珍らしく群集をなし灼熱の太陽は往時と変わらず照りつけていた。三月四日帰国の為ウエワクを離れる日宿舎から見る自然は何事もなかつたかのような平和な風景、あのツル山も青く静かに眠つていた。空路激戦のあつたマダン、ラエを経てポートモレスビー着翌五日晴天に恵まれ同地を日本に向け離陸した。眼下に横たわる大陸、英霊の血で朱に染めたであろうあの山この川そして再び訪れることもないであろうこの地。「一二万七千六百柱の英霊よ亡き肉親よ安らかに眠られよ。そして日本を永久にお守りください。」心の中で叫びつづけていた。熱い熱い涙がとどめもなく頬を濡らし合掌した手には汗がじつとりとしめつていた。ニューギニアは段々とかすんでいった。合掌。

ニューギニア慰霊巡拝団の記

二十師団(歩七九) 杉野 一 幸

歩七九では、昨年からニューギニア慰霊巡拝の計画があつた。せつかくなら政府の慰霊碑除幕式にあわせようということ、早目にホテルを確保したため、部隊戦友会としての式典参列は我々だけに、他部隊をも代表するような形になつてしまつたが、その点まず御了解をえておきたい。

さて七九慰霊巡拝団二十一名(团长福家隆戦友十五、遺族四、添乗写真二)は、九月十二日、福岡に集合、結団式をやり、翌十三日朝、福岡空港より香港経由、ポートモレスビーに向け出発した。乗りつぎの關係で、午後半日ほど香港島を見物、超高層ビルアパート群の林立する香港島の景観に目をみはりながら、夜半モレスビー向けとび立った。翌朝モレスビー着。直ちにニューギニア航空にのりかえ、ラエに到着、途中雲のため、残念ながら南海支隊が補給なき踏破行に恨をのんだスタンレー山脈も、五十一師団が六ヶ月にわたつて激しい防戦を闘つたサラモア附近も、見ることができなかった。ラエにてチャーターしていたプロペラ機にのりかえ、フィンシユハーフェン向けとびたつたが、これまた雲のため、五十一師団が撤退のかん難辛苦したサラワケット山等は見ることができなかった。正午すぎフィンシユに着陸。宿泊所はドレーガーハーヘンロッジで急ぎ昼食をとり、カテカ、ソング河地区に向つたが、途中マペ河増水のため車が渡れず、やむなく長い釣り橋を渡る。雨が降りだしたので、対岸の部落で雨やどりをしながら、手配した車を持ったが車はこないし、雨は強くなるばかり、やむをえず明日に延ばすことにして、宿舎にひきあげた。夕食は、日本から携行した材料に、その昔の炊事班長殿が腕をふるつた。慰霊行にふさわしい野戦食?に、一同舌づつみをつつ。その夜は、学校の教室に蚊取り線香をたいて寝る。ニューギニア特有の豪雨が、一晩中続いて。翌朝、豪雨なお一向にやまず、残念なが

らカテカ、ソング行きは断念せざるをえなくなる。やむなく海岸のあずま屋の中で、慰霊祭を行う。日の丸の国旗をか、げ、祭壇をつくり、小さな花輪や各人が持参した酒、タバコ、菓子類を供え、テープに収めた般若心経で、雨の日の厳肅な慰霊祭を行うことができたのは、印象深いものとなつた。二十師団のフィンシユ作戦のさい、歩七九、八〇を始め、砲工等の師団主力と二三八連隊の田代大隊が一ヶ月以上をわたつて激戦をくりかえし、多くの戦死者を出したソング両岸地区とサ高地方面に行けなかつたことは、一同まことに残念であつた。

しかし考えてみれば、この附近も敵の上陸当初、八〇連隊や船舶海軍諸部隊の戦場になつたところであり、慰霊祭を行うに十分の意義ある場所として、満足することにした。慰霊祭を終つて、小雨の中、マダンより迎えるプロペラ機にのる。マダンまでの飛行は、二十師団、五十一師団が、ガリから山の中を転進して言語に絶する苦難をなめ、多くの犠牲者をだしたいわゆるガリ転進路ぞいに飛ぶ予定であつたが、雲のため危険で山に近づけず、海岸線をとばざるをえなかつた。海

岸の方は雲の切れ目より、ナババ、ガリ、グンビ岬、ボガジン等を見ることができ、写真に収めることができたのは幸いであつた。当時、この海岸線を敵の魚雷艇と戦いながら海上輸送に日夜悪戦苦闘した船舶工兵部隊の勇戦ぶりがしのばれた。しかし一方、始め二十師団主力と工兵道路諸部隊が、自動車道構築にとりくみ、その後歩七八、歩二二九を主力とした中井支隊(のち松本支隊)が、師団のフィンシユ作戦の側背掩護と兵団の転進掩護のため、半年にわたつて敵の攻撃を阻止し奮戦したフィニステル山系とラム河畔を空からみることができなかったことは、心残りであつた。また前日ラエから別行動をとつてマダンに行き、この日へりをチャーター

して、ノコボとガリ東方ウルワ河に向け出発した二組の遺族と戦友の一行四名は、ガリ東方の河畔に着陸して慰霊できたもの、ノコボでは雲にとどされて近づけず、空から慰霊せざるをえなかつたのは残念であつた。

さてマダンでは港に近いマダンホテルに宿泊。翌朝マダンの海と日本の方角を望むことのできるヤボボ慰霊碑の前で、第二回目の慰霊祭を行った。忽ち現地人が数十人も集り、われわれの慰霊祭を見物していたが、目的はどうやら終つたあとのお供え物にあつたようだ。いや、それはそれで大いに結構、日本から持参したお供え物を彼等が食べてくれるのも、またこれ供養の一つであらうし、亡き戦友や肉親を思う気持は、彼等にも通じ、日本人へのよい印象を与えるにちがいない。午後には、海岸に残されている高射砲をみて、有名なマダン高射部隊の奮戦ぶりを思い、ついで軍直諸部隊が駐留していた大椰子林の中を、車を飛ばしてアムロンの猛頭山に登る。軍司令部のあつたところ、こ、からアレキシス、マダン方面の海を眺めてのち、急いでマダンにひき返す。以上でマダンの予定を終り、翌朝ウエワク行きのジェット機にのる。

幸いこんどは快晴、ウリンガン、ボキア、ハンサの海岸線がよく見え、続いて曲りくねつたラム河、セビック河の大湿地帯を見下しながら、腰までつかつて二、三週間も湿地帯を歩き続けた撤退行の苦戦を思い、皆ラム河だ、セビックだ、と声をあげながら窓から喰い入るのやうに見つめ、盛んにカメラのシャッターを切り続けた。左手にははるかにニューギニアの中央山脈が雲の上に雄大な姿を現わし、手前には広々としたセビック河流域の平原と、山南地区の低い山地の起伏が波のように見える。このような快晴に恵まれ、思う存分、空から展開する見覚えのある地域を、まるで地図でもみるやうに眺めることができたのは、感無量であると同時に、大きな喜びであつた。翌十六日、この日はパプア・ニューギニアの独立記念日である。この日にあわせて慰霊碑除幕式が行われたわけだ。式典と慰霊祭の模様については他の報告に譲り、省略するが、この立派な慰霊碑と附属公園が、

今後は、各部隊の慰霊巡拝団の慰霊行事や、一般旅行者のお参りが行われるにふさわしい施設となるであらう。

ウエワク半島のウエワクホテルは湾を望んで見晴しよく、半島の突端には海軍根拠地隊の堅固な防空壕がそのまゝ、立派に保存されていた。翌十七日は、軍が二十、四十一、五十一の三ヶ師団をならべて、最後の決戦をしたアイタペ方面行きと、山南方面の二班に分れる予定であつたが、道路の關係でアイタペまで行けなくなつたため、全員が山南地区アレキサンダー山系の南のヤンゴールに向け、マイクロバスで出発した。ヤンゴールにいた舗装路なみの立派な道路だが、登り下りの急な独特の道をとばすこと約三時間で到着。途中コーヒー、コ、ア栽培が目につく。握り飯で昼食後、ヤンゴールの河原を慰霊祭場にえらぶ。こ、の若い外人宣教師の好意で、さらに奥地のモンブックまで、自分の四輪駆動車を提供し、自ら運転してくれることになり、この地区で終戦まで生き残つた九名が出発した。この間、残つた一同は、河原で、現地民との交流を行つたが、中に当時の日本兵から教わつた「モシモシ亀ヨ」などの歌を、上手に?歌つてくれた人がいたのは、驚きであつた。やがてモンブック組が帰つてきて、多くの現地民の見守るなか、四回目の慰霊祭を行う。こ、で特筆すべき一コマは、かつて日本軍に終戦後までもよく協力してくれた、当時の大酋長ソコペン氏が今猶現存し飲を共にすることができたことであつた。さらに翌十八日、こんどは海岸道をブーツ、十国峠附近まで車をとばす。ブーツ飛行場は牧場になつてゐる由だが、いまだに大型爆弾の穴がいくつも残つており、日本軍の飛行機エンジンもいくつかがそのまゝにしてあるのを見て、当時の航空部隊や飛行場部隊等の苦勞をしのんだ。ついでダグアから十国峠を越えたオクナル部落まで登り、現地民と交流、帰りに十国峠頂上にある四十一飛行場大隊の慰霊碑にお線香を供える。そして、かつて七九が一時駐留していたダグア附近の小さな河原で、最後の第五回目の慰霊祭を行つた。これでわれわれのニューギニア

慰靈行事はすべて終わった。この日の夕方、ウエワクよりモレスビーに飛び、一泊して翌十九日午前中、モレスビーを見物、午後の便で香港に向け飛び立った。さらばニューギニアよ、戦没者の霊よ安かれ、そしてパプア・ニューギニアの住民に幸あれ、一同は心から折りながら、ニューギニアを後にした。

最後に当時と比べて彼の地の一般的な印象をまとめてみたい。戦後三十六年、われわれの目に映ったニューギニアの変わり方は、全く激しかった。まず第一が、国の独立であり、これこそ最大の变化である。数千年の歴史のへだたりを一気にとび越えて、近代国家の仲間入りをしたわけで、前途に困難もあろうが、心から祝福したい。マダンやウエワクは、変わっており、当時の面影はない。とくにマダンの発展には目を見はるものがある。近代的建物もあり、町中いたるところに美しい熱帯の花が咲き乱れ、正に「パプア・ニューギニア第一の美しい都市」の名に恥じないものであった。住民の変わり方は、なほ一層激しかった。まず女性の坊主頭が普通のヘヤースタイルに変わり、腰みのも姿を消し、思い思いの衣類をつけていた。男性の赤い腰巻きラブラブもなくなり、短ズボンに変わった。入れ墨も殆んどなくなった。十五才という三人の若者達にタバコをやるうとしたが、「のまないから」と受けとらなかつた。当時は、小さな子供までが、現地のタバコの葉をまるめてのんでいたのに……都会ではサンダルばかりもみられたが、まだ一般的にはハダシであった。また当時は、物々交換経済であったが、今では、独立国の紙幣と金属貨幣が、田舎まで立派に通用している。たゞ買物のお釣りの計算は、今一つのもどかしさを感じたが……

しかし、食と住の面では、都会以外は、当時と変っていないようだ。政府が、住民の現金収入のために、コーヒ、ココア等の栽培に力をいれているというから、産業開発が進むにつれて、食と住の面も次第に向上していくにちがいない。現地住民の日本人に対する感情は、当時と変りはなく、大変好意をもってくれているのを確認できたことはうれしかった。当時白人は自分達を牛や豚の動物なみにしか

あつかってくれなかつたのに日本人は、同じ人間としてあつかってくれた。こゝに日本人に親近感をもつ根本原因があつたといえよう。たゞ、白人も、現在では彼等を独立させたのだから、白人に対する気持も、以前前とは大きく変つてきているものと思われる。今後、日本とパプア・ニューギニアとの友好協力には、日本人は彼等を「土人」(禁句である)としてではなく、開発途上国であつても、対等の国民対国民として接し、真の共存共栄の精神をもつて、彼等の経済発展に、心から協力援助していくことが、最も重要な鍵であろう。終りに、今度の慰霊旅行に同行され大変行き届いたお世話をいただいた国際航空旅行サービス社の本間営業部長とが島の遺児でプロカメラマンの菊池栄喜氏に對

書き残さずには死ねない

戦誌刊行会代表幹事 福家隆 (元第二十師団参謀勤務)

一、はじめに
去年の会報第十号に、彼地を慰霊巡拝しての所懐、敗軍の兵、兵を語らん、と拙稿したことが機縁となり、志を同うする若い有能なスタッフの熱意に励まされて、菲才、戦誌刊行会を結成し、戦誌、隊史、一代記、追悼録などの編纂発行を志しましたところ、東部ニューギニア戦友諸兄は、もとより、各方面からの温かいご激励ご指教を忝うし、お蔭をもつて、発足忽々ながら別記のとおり進行し、ご好評いただいておりますことは、偏えに、皆様のお蔭と感佩に堪えず、紙上、先づ以て厚くお礼申上げる次第です。

- しては勿論のこと計画初期の段階から陰に陽にご支援いただいた兄弟連隊の戦友で日バ協会の専務理事梶塚喜久雄氏、エア・ニューギニア岩淵支社長に対しても心から感謝の意を表したい。(終)
- 歩七九慰霊巡拝団
- | | | |
|------|-------|-------|
| 福家隆 | 吉田茂光 | 大上信夫 |
| 津田幸盛 | 田崎徳実 | 馬場繁喜 |
| 小袋秀夫 | 土田武徳 | 福井喜代吉 |
| 田坂博 | 杉野一幸 | 竹下勇 |
| 園田定 | 原義憲 | 田中直一 |
| 田中サダ | 千田美姿子 | 富永俊三 |
| 齊藤寛 | 菊池栄喜 | 本間一仁 |
- なお、歩七九慰霊巡拝団では巡拝記念アルバムを作製しご希望があれば参加者以外にも実費でお分けしている。(筆者は、フィンシュハーヘン、アント岬逆上陸隊長)

「書き残さずには死ねない」
これは多くの皆様方から続々、共感と謝意と激励、が寄せられている「東部ニューギニア戦線」の著者、鈴木正己氏ご執筆の動機であり、基本であります。程度こそあれ彼地戦友に共通の心情と云えましょう。

ところが、この鈴木氏の稿でさえ過去十年近くも、出版社のお倉入りとなつたまま、埃を被りつづけていたような次第です。

三、活字化への道
そこで、私共では、進んでこういった皆様のご相談を承り、専門的立場からのアドバイスを申上げ、成るべくお手間を取らないようにしながら、「よりよい」ものが「より安く」でき、しかも「より多く」の方々に広く読んでもいただけるような「本づくり」のお手伝いをさせていただいてある次第です。

どうぞ、ご遠慮なくご活用下さい。

今や活字文明の世、私どもは活字氾濫の渦中にあり、思えば、日々、人の書いたものばかり読まされつづけているわけですが、「人に歴史あり」で、お互一人一人の一生は夫々がドラマである筈です。

況してや、あの苛酷で稀有な体験は、人々に異なつて貴重であり、「小説よりも奇」とさえ云えましょう。

今のうちに「脳裡と胸奥」にあるものを、プロを媒体としてでも活字化した記録に留め「戦友との永遠の墓銘碑」「何物にも代え難い遺産」として、子々孫々に、地域に、そして広くこの世に遺し、正しい史観の展開に寄与していただきたいと念願する次第です。

英霊慰霊の実もまた、これにあると信ずるのです。

不毛の島、ニューギニアに散つた将兵の記録を抜いて、日本の歴史を綴つてほしく
(終)

十 国 峠

元四十一飛行場大隊 中島 兼治

昭和20年4月20日部隊は(41ab:当時1/79i)敵のブーツ飛行場の使用を阻止するためブーツ東飛行場東側にある十国峠附近に展開し、飢と栄養失調に耐え圧倒的に優勢な火力と兵力に抗しつつ奮戦力闘したが、衆寡敵せず、峠の左側獅子山を占領していた第3中隊(警備中隊)が5月4日隊長以下全員玉砕するに至り、同日24時命によりハムシック方面に後退するの止むなきに至った。時に中隊の第1線兵力僅かに隊長以下2名となった。

「十国峠」……それは第41飛行場大隊生存者にとつて終生忘れることの出来ない痛恨の地であり、多数の戦友が散華した峠である。

この度、はからずもニューギニア慰霊団の一員に加えていただき、36年間夢寝の間も忘れることの出来なかつたウエワク、ブーツ地区の古戦場を巡拝し、13万英霊を弔うことが出来ましたことは一重に団長以下皆々様の苦勞の賜と深く感謝しております。その上41abとして最大の激戦地であり多数の戦友が眠る「十国峠」に慰霊塔を建立出来ましたことは荒畑、鈴木両氏を始めとする生存者及びご遺族のお力によるものと衷心よりお礼申し上げます。

連日の砲撃でさすがのジャングルも禿げ山と化し、山容改まるの観があつた十国峠も36年を経た現在熱帯樹がうっ蒼と繁り昼なお暗く、峠に登る道の両側に、或は山中に草むす屍となつて眠っている戦友の骨を拾うよすがもなく、ただ新しく建てた慰霊塔の前で一心不乱に誦経する遺族、戦友達の声が峠の谷に、山に、樹海に、紺碧の海に木霊して、英霊よ来たりませ」と泣くが如く響きわたり、誦経の声も次第に涙声に、泣き声に変わつて行くのをどうすることも出来ませんでした。

かつて、最後の輸送船の指揮官として空襲の最中、甲板上から盛んに燃えさかる対岸の

炎を眺めながら揚陸作戦を行なつたウエワクも今は清く青く澄みわたり、紺碧のさざ波が平和な音を立てて椰子の木の生い繁る岸辺に打ちよせ、子供達が喜々とたわむれる姿を眺めながら思いは洋上で戦死した戦友の上に馳せるのでした。

武装解除され屈辱の日々を送つたムッシ島も、故国に帰る日を目前にして散つて行つた多くの戦友の英霊を温く包みながら清らかな平和な海に浮んでおりました。その他見るもの凡てが昔の思い出となつて走馬燈のように私の脳裏を駆けめぐるのを禁じ得ませんでした。皆さんほんとに有難うございました。

取り止めのない老の練言を申し述べました。最後に本稿をお借りしまして私達と行動を共にしましたご遺族の方々が私に寄せられましたお手紙の一部を載せていただきます。

略：十国峠に慰霊塔をお建て下さいまして魂も安んじてくれました事と厚くお礼申し上げます。半年前にお詣りいたしました節は帰りまして、ニューギニアを思い出さず度泣きが出て困りましたが、この度は何か心が安らぎましたような思いでございます。中略一人日記のつもりで記しました生活の歌でございますが：略

亡き夫の友につき行くニューギニア
慰霊の塔を共に建ててむと
この地にて部隊全滅せしと聞く
ニューギニア島十国峠

ニューギニア十国峠に慰霊塔
戦友の建てますみ魂よ来ませ
ニューギニア十国峠に慰霊塔
建てて泣きたり戦友も遺族われらも
飯盒に戦友炊きませし白き飯
心こもれる供物数々
慰霊塔建ちてみ魂の鎮まるや

ウエワクの海今日波立たず
ウエワクのホテル庭に早く起きて
経誦すそばに鳥も来て鳴く
引き返し行きたく思う遠ざかる
ウエワクの空を機の窓に見る
原 千工様

略：此の度は慰霊団の一員として参加させて頂き誠に有難うございました。この様な旧戦場の地へ皆々様と共に慰霊の旅の出来ました事偶しくも無事果し得ましてこれ皆々様のお蔭で何とお礼の申し上げる言葉もございません。ただ、心より身にしみて有難く、無事帰宅前への報告はただ涙々でございます。旅行中の毎日皆々様の御優しき御心に守られて感謝の心で御礼を申し上げる私誠に有難うございました。以下略

略：此の度慰霊巡拝に際しまして色々とお世話になりました。誠に有難うございました。お蔭様で永年の切なる念願がかないまして感謝の心で一杯でございます。9日間の感謝の日々を文盲な私にはとても表現出来ま

略：此の度のパプア・ニューギニア慰霊巡拝に際しましては私共の多年に亘る念願が達せられ、立派な戦没者慰霊塔の建立も出来まして皆様と共に念仏合掌し、現地でよき供養が出来本当に嬉しく存じております。これ一重に皆々様の心からのご配慮の賜と深く感謝し心からお礼申し上げます。帰国後老父母、兄弟相集いまして仏前に報告しニューギニアから持ち帰りました砂石貝サンゴなどを分け合いながら現地の様子、ウエワクの慰霊祭の模様旧ブーツ飛行場巡拝慰霊などについて老父母に良く説明が出来、これで老父母も亡き弟の良い供養が出来て感涙の極みでした。重ねて厚くお礼申し上げます。以下略

略：この度慰霊巡拝に際しまして色々とお世話になりました。誠に有難うございました。お蔭様で永年の切なる念願がかないまして感謝の心で一杯でございます。9日間の感謝の日々を文盲な私にはとても表現出来ま

PNGセピツクの今昔

照空二中隊 渡辺 亮一

PNG友好協会10周年記念現地総会ツアーに参加し開発途上10余年ぶりの現地に接した。率直に言つてウエワク地区が他地区に比較して多分のハンデーがついてローカルである反面セピツク地方出身者が各地に進出しなにかしらの職を得て意欲的に暮している姿に接し誇りがましく思い、ツアーの参加者の多くが、自分の出来ごとの様に感動したはずである。昔は豊かな土地でありながら人口が比較的に少なく部外者の進入を防ぎ得る地形を選び一定距離を保ち小高い丘の上に部落が集中し附近部落は兄弟親族(ワントーク)で部落名称にNo.1 No.2 No.3どこどこと名づけて酋長が存在し伝統習慣宗教等を含めて閉鎖的な

がらも自助努力、自給自足の村々であった。独特なニツパヤシ作りの住いを共同作業で築き男女子供皆んなが素裸(オールストリップ)の服装費がいらぬ。農耕も共同作業で喰うだけ採り入れ喰う方法も原始生活そのもの。一夫多妻の共同暮らし、ただ世の中に存在しているだけだった。しかしながら仲間内に病人が発生すると医薬がなく彼等の伝統的な祈とうで見まもり死せば数ヶ月は、喪に服して悲しみ合い、敵部落(ビルワ)に対してはけん制し男達は投槍(スベヤ)数本を常にたずさえ夜間は男だけの集団起居で部落一族を護る習慣であった。敵部落の者と争つて傷

せんが、ご生還されました皆々様方が一語にいらつして下さつたればこそ、懇ろに慰霊巡拝が出来まして深く感謝申し上げます。あの松の岬で炊いて頂きました飯盒の飯のおいしかった事は生涯忘れることは出来ません。以下略
武末 茂様

つけられたり殺された場合は其の部族の者だ
れかれかまわず仕返しをする部族間の報復行
為の慣習は勇ましくすごかった。

このような風習は、30余年経た今日日本を
含めた西歐型に進んで来たものもまだまだ
原始時代と二十世紀が混在し同じ地域内での
部族間の歴史背景にいろいろ相違のあること
を留意する必要がある。

各地にカトリックの布教活動と共に国立病
院が設けられ衛生観念が向上し小児の死亡率
が少なく人口増加は素晴らしい。学校教育(スク
ール)熱が旺盛で文盲率も少ない。新しい世
代の希望と意欲に燃えて熱心に学び知識アッ
プしたものの地域産業開発のテンポが遅れて
いる現状から就職の庭が狭すぎて従って彼等
が自給自足の村からは外出して賃金労働を目
指し各都市にどんどん増え仕事からあふれ
ている。これら加速度な増し方は急激な社会
変革で近い将来に危機に直面する新たな不安
を生むかも知れない気がしてならない。

物交時代から貨幣(マネー)経済に移って
数ヶ年が経過した。昔は3本のヤシの木があ
れば自給自足出来たが10本のヤシが必要にな
って来て、あとの7本をどうしようかと言
う単純な価値観はこれまで通りのハッピーであ
るわけにはいかない。ほうっておけば一生幸
せに暮らせるだろう彼等に自動車、ラジオあら
ゆる必需品を売りつけて欲望を起させるのが
果して良いことかと疑問を感じるが、しかし
すでに現実には他の誰かがそうしてしまっ
ている。人口増加の要因からも何時かは経済的
な大問題にぶつからざるを得ないPNGが理
想郷であってほしいと言ふのは所詮夢と言
うわけだろうか。

そこで援助問題だがとく海外援助計画は
資本や技術をどの様に導入するかと云う点が
強調され、一方は憐みから物や金を送る事し
か考えない物量的な考えと他方は現地に身を
投じて協働する以外には援助価値を認めない
考えで両極端に分かれがち、どれもが発展途
上国の貧しい底辺を現実を理解することに

ながらず、かえって自立を妨げる援助漬けに
してしまっていないだろうか。率直なところ
綺麗ごとだけですまされない。こうした極論
で心を閑ざしてしまうのは残念でしかたがな
い。

そこで具体的例を挙げるとセビック地方
は主として部落の周囲が河川、沼に囲まれ湿
地帯で日常活動が昔から丸木舟(カヌー)が
必需品で土民達は伝統的に蛮刀一丁で木材を
操作する技術が発達、カヌーはもとより生活
必需品から民芸品を作るすが引継がれて、
これが物交され今日では貨幣で取引出来て現
金収入源となっている。

子供達をスクールに学ばせ自動車を買い、
カヌーに取り付ける船外機ヤマハのエンジン
を求め、ニッパヤシ作りの屋根がトタン板
張りに替り夜は石油ランプが燈る。この様に
近代化にマネーがサイクルする要素は昔から
基盤が出来ていた。

貨幣経済が浸透した昨今では部落で生産し
た物資をカヌーに積み込みエンジン音をたてて
セビックの各支流を渡り歩き、マダン方面や
ウエワク方面に通ずる道路の中継部落に接岸
ワントークのハウスに駐車してあるトラック
に乗継ぎ目的地に到達し、ここにもハウスが
あつて市場で稼ぎながら子供達を通学させて
これら働く意欲にもえている。数々の急激な
社会変革で次は上水設備電燈かと先進国に近
ずいて行くであろう。このような働く意欲と
生産を高める目的努力の姿を参考に理解して
自動車を基盤にした上でどのようなにして合
理的な援助をするかを問題にするのが当然で、
そこで何をやるか!!

昼中の気温が常に体温をはるかに上まわる
環境下の彼等に日本の勤勉化を急激に進める
ことは当然むりで風土習慣に適した食生活か
ら体力気力作りの改善を最優先とする。改善
意欲のある彼等の活動グループを見つけ出し
連帯指導に根ざした継続的援助活動を着実に
育ててゆく。望むことは欲得ずくめの出稼ぎ
根生ではPNG民族から然警をかって自滅す

ることにならないように、従って務めて底辺
の人々と友人になって彼等の子供がやがて自
からの手で自分達の未来を築けるようなその
願いを共に分かち合つて心の草の根を友好と協
調による新しいPNG建設開拓の基調にし
なければならぬ。

日バ友好協会創立の主旨に思いを新にして
挺身協力共存共栄、これに寄与し共に歓喜を
享けんとする者のみを、彼の地にねむれる多
くの戦友の霊が御照覧になられ希望して待っ
ていると言つても過言でなからう。

日本製品のミシンを購入している女性のほ
んどが自分と子供の簡単着位をやつと縫
えて男ものとなることさっぱり駄目らしい、従
つてマーケットの市販のチャイナ製品のシヤ
ツズボン類でも高値である。

これ一つを考えても裁断用の型紙の提供で
も良いし高級デザインが必要でないから、洋
裁学校の生徒、一般の若い女性、主婦、器用
なジイサン達にトレーニングセンターで数日
間交代で教えて戴く条件でツアー集めの企画
が出来たら誠の親善友好で末永く交流が出来
て面白いと思う。彼女達がこれに依つて覚え
て手放して自由に縫えるようになるのに相当
時間を要すことで出来れば共同作業所で流れ
工程の単純作業分業方法が相当でなからうか。
製品化して市場を開拓し安価に販売出来るま
で育て、やがてPNG全島、南方各地に安価
な商品が提供出来るのが理想である。

走っている自動車の90%以上が日本製、こ
の修理整備技術の指導養成が急務とされ、P
NG政府の要請に基づきこの数ヶ年研修生を
引受けて実績を挙げて参つて結構なことであ
りますが、あえてエンジニアの立場から批判
させて戴くと、
①これらの高度技術、作業範囲の広い職種
を短期間で覚えさせられる、覚えられると
思うことに疑問がある。単純工程/分業、専
門作業が相当である。
②研究生の受入条件がローカル地区からの
若者にチャンスが少ない。

③チャンスを掴み来日しても別世界の生活
で浦島太郎でない気が散つて仕事を覚える
環境でないはずだ。

④現在の所有者又はドライバーに初歩的な
メンテナスが出来る相談、トレーニングセン
ターの開設が急務でなからうか、研修生の帰
国後の研修効果について長期特定期間はむ
りとしても短期間交代計画で定年退職後の先
生方の御奉仕をお願い出来ないものかと考え
る。

願わくば、これらの各種総合トレーニング
センターをローカルのウエワクに開設された
ことにより日本/PNGの交流が盛んになり
PNG全島から若者達がウエワクに集つて来
て文化都市として発展して行く数々の夢の実
現に独自の観点を叩きだいて提供します
ので勇気ある戦友達でプロジェクトを編成し
議論して戴けます日が到来することを心から
願つてやみません。

お詫びと訂正

「戦中詩」として岩崎賢二、名により会
報八号に掲載した記事は、渡辺文也氏の
作になる「ニューギニア遠征行」よりの
剽窃であつたことが判明致しました。故
人となつた岩崎氏よりの送稿を信じ調査
もせず記載した編集部への不明をお詫びし
て訂正致します。
「ニューギニア遠征行」渡辺文也詩は、
「この一編を遠く南浜に散華せる戦友の
霊に捧ぐ」
として、第一部より第十部、五十節よ
り成り、各部には詳細な解説つきの大冊
であるため当号、紙数不足のため掲載出
来兼ねました、後日改めて著者の了解の
もとで披露致します。

ギルワ陣地の遺骨収集報告

福山歩兵第四十一連隊
東部ニューギニア戦友会

前垣 寿三

去る昭和五十三年四月、我が戦友会有志は、忘れようとして忘れる事の出来ない、ポートモレスビー攻略戦及び、その後に於ける、転戦作戦の悲惨極まりない戦場で、亡くなった、多くの戦友達の最後を偲び、一追悼の念遣る方なく、巡拝団を結成して、ニューギニアに飛び、旧ギルワ陣地の一角で慰霊祭を行いました。

——其処は、サナンタ部落から、約四軒南に入った地点で、部落の長老の言いに依れば、数千の日本兵の遺体を埋葬したと言ふ。其の辺り一帯には、弾痕の生々しい飯盒、水筒、等を始め銃弾、手榴弾、編上靴の踵、等が夥しく散乱して居り、此の儘放置するに忍びず、帰国後我々戦友会で協議の結果、遺骨の収集方を、県庁援護課を通じて、厚生省に陳情致しました。その実現を念じながら一日



千秋の思いで、待期すること三年、ヤツト念願叶い、今回の遺骨収集団の派遣が決まり、生残りの我々にとって、無上の喜びでありました。

今回の遺骨収集は、ベララベラの生存者調査と、ラエ方面の遺骨収集と、同時に実施され、三回に分れての事業でありました。

一行は九月二十三日、成田空港を出発、香港経由で、ポートモレスビーまで行き、そこから別れて、それぞれの目的地に向いました。

八月二十五日早朝七時頃、ポートモレスビー空港に到着、入国手続きを終えると、直ちに国内線に乗換え、目的地ポ・ンデターに向いました。

ポ・ンデターまでの飛行時間は、僅か三十五分程であります。離陸すると間もなく、三十八年前ポートモレスビー目指して進撃した、古戦場の真上を飛行し、眼下にジャングルに蔽われたオーエンスタンレーの峻嶒と、多くの戦友達の命を呑んだ、クムシの濁流が、蛇行しながら、北に向って流れて居るのが一手に取るように眺められ、当時の思い出が、走馬燈のように脳裡に浮かび、眼頭の熱くなるのを覚えました。

山頂を過ぎると、早くも機は着陸態勢に入り、ポ・ンデターの上空を、一旋回して、ギルワエアポートに着陸、小さな木造の待合室とスレート葺きの倉庫があるだけの、田舎の停車場のような、殺風景な空港でありましたが、

軍用機の残骸が、空港のアクセサリーとして置かれており、一思出深い古戦場の一角に再度足跡を印した感激は一人のものがありました。

スケジュールは、今日と明日の晩、ブナのレストハウス宿泊となつて居るので、迎えのバスで、ブナに向いました。

バスと言っても、マイクロバスのオンボロ車で、日本では使物にならないような、日本製のバスでした。舗装のしていないガタガタ道を、砂塵を巻き上げながら、埃まみれになつて走り続け、当時ニューギニア方面唯一の航空基地、ブナ飛行場の滑走路を通り抜けました。道路になつて居る滑走路の路傍に、横たわる飛行機の残骸に、往時の激戦の横子が偲ばれ、感慨に浸つて居る中に、ブナに到着いたしました。

部落に到着して、驚いた事には、小学校の児童が整列して、部落総出の歓迎式があり、予想だにして居なかった、一行はそのままだ歓迎会場に案内されて、驚きと戸惑いに、大いに面喰いました。

会場は海岸に近い椰子林の中に設けられ、首長以下部落の老若男女挙げて会場を、取巻き、しきりに、果物や料理を奨めて呉れましたが、入国したばかりで、民情風俗に全く不明な一行には、応答の術もなく、大変困惑いたしました。それでも彼等の好意に対しては、感謝いたしました。それが彼等の好意に対しては、感謝いたしました。

一刻でも早く、レストハウスに落付いて旅装を解き、明日からの行動準備をしなれば、と思いつつも、片言英語のヤリトリで、折角の好意ある歓迎会も、一行にとつては有難くない歓迎会となりました。

漸く歓迎会が終り、案内されたレストハウスは、新築ではありませんが、椰子葺きのニューギニアではどこでも見られる、高床のニツパ、ハウスでありました。

とても、五人の一行が宿泊出来る家ではなく、各自のトランクと団装備の荷物を入れるだけで満杯となり、あきれ返るばかりであり

ました。他に空家らしきものは無く、時刻も既に夕刻となつては、他に宿舎を求める訳には行かず、仕方なく、その家に泊りました。着のみのまゝで、重なり合う様にして一晩を明かしました。もう一晩とは、とても我慢出来ず、翌朝早々に、ボンデグターに引上げました。

引上げるに當つて、之れ又麗大な宿泊費を要求され、色々交渉するも、受入れられる様子もなく遂に、州政庁の幹施を仰ぐことになり、やつと解決しましたが、後で聞くとここに依ると、歓迎会費用とハウスの建築費まで、要求せられたとの話で、我々日本人の感覚では、全く理解出来ない事でありました。

眠れない、入国の初夜をブナで明かしたものの、さて今晚の宿はどうするのか、不安でありましたが、小竹班長は、政庁の照会で、CTC(クリスチャン、トレーニング、センター)の一棟を、今晚だけと言う事で借りて頂き、ようやく安堵いたしました。

CTCは、キリスト教の伝導施設であり、教徒の教育研修が行われて居る様でありました。建物は、スレート葺き、ブロック建ての平家で、木製の粗末な寝台があるだけの、実に殺風景なものであります。午後六時から九時まででは電燈が灯り、水だけですがシャワーもあり、便所も付いて居り、ブナとは比較にならない、宿舎でありました。

思わぬ歓迎会や宿舎のトラブルで、二日間を無駄に費やし、勿体ないと残念に思いましたが、之れも国民感情の異なる国では仕方ない事とあきらめ、二十七日からはホテルに落付き、いよいよ本格的な取骨作業に取懸る事となり、取敢えず、今日は、ギルワ生き残りの我々戦友会メンバーで、陳情書に記載した取骨地点とギルワ陣地跡の、確認と現地偵察を行い、他は残留して明日からの、作業に必要な器材の調達をする事として、我々一行八人は、現地向わんとしましたが、カブラハンボでは我々一行を歓迎する為、部落挙つて一待受けで居ると言う話を聞き、現地入りを急ぐ我々

ました。他に空家らしきものは無く、時刻も既に夕刻となつては、他に宿舎を求める訳には行かず、仕方なく、その家に泊りました。着のみのまゝで、重なり合う様にして一晩を明かしました。もう一晩とは、とても我慢出来ず、翌朝早々に、ボンデグターに引上げました。

の出鼻を挫かれた思いでありましたカブララハンボは、高知県ニューギニア会や小竹班長の旧知の部落である事を聞いて居りましたので、八人だけが歓迎会にのぞむ話には行かず、急拠全員が行く事となりましたが、入国三日目になっても、未だに思い通り行動出来ないもどかしさにいらさせられました。歓迎会は、ブナの場合と異り、非常に友好的で楽しいものでありましたが、我々七人は、いつまでも、歓迎会を楽しんで居る話に行かず、小竹班長以下を残して、ギルワに向いました。ギルワ陣地に行くには、バスでキラトン「ニューガラフ」まで行き、そこから海岸の波打際を徒歩で約五料東に行つて、サナナダの部落に到着し、そこから旧陣地跡に侵入する道順であります。

此の海岸は、バサブアが潰滅した際、私車身でギルワに脱出した思い出深い海岸であり、又慰霊巡拝の時も歩いた事のある、美しい海岸であります。灼熱の太陽に照らされて歩くのは苦勞でありました。

これからは毎日、この海岸を歩いて往復しなければならぬが大変な事だと、思い乍ら先を急いで正午頃、サナナダに到着しました。部族では既に我々が来るのを察知して居り、巡拝の際案内をして呉れた、アナナスやピサリ等の懐かしい人達が出迎えて呉れ、「アリガトウ」の挨拶で、握手を交わし旧交を温め合う事が出来ました。

日本から持つて来た、彼等への土産を渡すと大変喜んで、これからの収骨作業への協力を約束して呉れて、大いに安堵し、強力な味方を得た思いでした。

此処で我々は二班に分れて、慰霊祭の地点確認には私と児玉、野上氏の三名が行き、ギルワ陣地へは、ギルワ撤退の最後まで、陣地に頑張つて、現地に詳しい、石田、西本、高木、川本氏等四名と、通訳を兼ねた学生権田君が行く事になり、四時に落ち合う事を約してそれぞれ目的地に向いました。

西本氏は、かつて最後までギルワの海岸警備

に當つて居た体験で、特にギルワ海岸の地理に詳しく、早速当時のソプタ、サンボに通ずる自動車道跡を発見し、一行を誘導して陣地跡に侵入し、現地人の案内で、遺体の埋葬場所や旧砲兵陣地跡及兵站病院跡と思われる地点を、偵察し遺骨の断片を収集して帰り、収骨可能である事を告げました。

一方慰霊祭跡を確認に行つた私達は、アナナスの案内で、難なく現地に着きましたが、以前来た時とは様子がすっかり變つて居りました。あれ程多くの、飯盆水筒銃弾手榴弾等の遺物が散乱して居たものが、跡かたもなく片付けられており、場所を間違たかと思うほどでありましたが、見覚えの太木があるので、正しく慰霊祭跡であり、アナナスに明日から此処で、お前達が埋めた遺体を発掘するから、協力して欲しい、と言つたところ、アナナスは、協力はするが此処には骨は無い、他に在る所を探すと、言つたのには、ビックリさせられました。

遺品の散乱状況や、彼等の言を信じて、国に陳情し、ヤット認められて、今此処に来て、遺骨の無いと言ふ事は、何んたる事か、余りにも予想が外れたアナナスの言に、打ちのめられた様に悄然となりました。

然し私には此の地点で、収骨する事を目的に来た以上、アナナスの言だけで、此処での収骨を無闇に変更する事は許されないので、既定通り、明日から重点的に此処で作業することを心に決めて、引返しましたが、何んとも言えない淋しきで、心中を風が吹き抜けた様な気がいたしました。

翌二十八日は、朝から雲行きが悪く、今にも降り出し相な天候でありましたが、早くも四日目を迎え、収骨を急ぐ一行の気持は、休む気等毛頭なく、全員雨具を持参して出発、今日はサナナダまでの道程を変更して、カブラハンボから、直接サナナダに行つて見る事とする。そうすれば、途中でギルワの中央陣地と、収骨地点との関係位置が判明するかも知れない、と言う事で、カブラハンボで、

人夫を雇ひ彼等の案内で、一人がやつと通れる土人道を一列になつてサナナダに向いました。カブラハンボから、五百米位歩いた路傍に、高知ニューギニア会が建てられた、慰霊碑があり、一札して先を急ぎましたが、道には到る処に太木が横倒しになつて居り、それを跨いで歩くのに閉口しました。

怪しい天候は途中で雨になり、ナイロン製の雨具は、降りか、る雨を凌ぐと同時に、汗の乾きも止めて呉れるので、内と外から濡れ一向に役に立たず、ジャングルの中を、雨宿りする場所もなくズブ濡れになつて降りしきる雨の中を、二時間余りも歩き続けて、ようやくサナナダに辿り着いただけで、途中でギルワ中央陣地との関係位置を探究する暇もなく、無情の雨を怨むばかりでありました。

幸にサナナダに着く頃から雨は上り、昼食の弁当をとる間に、先程までの雨は嘘のように晴れ渡り、快よい風に、濡れた体も徐々に乾き、昨日の偵察結果に依り、午後は全員でギルワ陣地跡を更に確認する為にギルワに向いました。サナナダからわずかメートル足らずの東に、ニューギルワと言う新しい部落があり、そこから陣地跡に入ったのでありますが、初めて見た、自動車道跡は往時の面影を偲ぶにふさわしく、自動車の通行可能な幅員をもつた形跡が、延々として南西の方向に走つて居り、旧ギルワ陣地に間違いないと確認しました。その当時九中隊の中隊長で戦後陸上自衛隊に勤務されて居た、林大尉(憲男氏)が書かれた、ギルワ陣地要図を石田氏が持つて居たので、それと照合して見ると、兵站病院跡や、砲兵陣地跡も、大体符合するのので、慰霊祭跡での収骨は、昨日のアナナスの言で後廻しにして、ギルワを先に収骨する事に、決め今日は一先づポボンデターに引揚げる事になりました。

二十九日、待望の収骨作業に取懸るべく、予め調達したシャベルや遺骨を収納する袋等を持つて、ギルワに向いました。サナナダで雇入れた人夫を連れて、ニューギルワに行きましたところ、先日ブナで顔見知りになつた人達が待ち受けて居り、ギルワ陣地跡への無断進入は許せない、此の辺りの土地は皆所有者が居り、その人の許しが必要で、その為には何かしらの料金が要る、今日はお前等が入る土地の所有者が居ないので入つては困る、と言つて我々の行動を阻止するので、小竹班長は懸命に拵合つて見たが、頑として聞き入れられず、止むなくサナナダに引返し、午後の行動を協議しましたところ、ギルワ陣地跡へは我々が案内するからついて来い、と言つて、ギルワ陣地方向に侵入しましたが、僅かに二三ヶ所陣地跡らしきものがあり、念のため発掘しましたが、クレオソートの空瓶やビール瓶が出土しただけで、遺骨は無く、空しく引揚げざるを得ませんでした。

ギルワでの我々の行動阻止は、考えて見ると二十五日から六日もかけての、ブナでのトブルが起因して居たのではなからうかと思われました。それは二日間の滞在が、彼等の予期に反して、一日で切上げられ、その上州政府で要求額を半額に値切られた、報復手段ではなかつたか、と思われるのでした。

結局今日も空振りに終り、スゴスゴとホテルに帰つて来ましたが、今度はホテルの宿泊費が一人一日当り四一、五キナで、此のま、期間中滞在すれば、各自が準備した、米弗では到底賄ひ切れない、特に学生諸君は、青年遺骨収集团からの助成もなく、極めて切りつめた予算しか持合せて居ないので、何んとか手を打たねばならないはめに陥りました。

収骨作業は意の如くはかどらず、宿泊も入国以来落付いて泊る事も出来ず、ほとほと困惑してまいりましたが、幸にも権田君が予め、C T Cの借入れを交渉して、神父さんの諒解を取付けて居て呉れたので、大助かりでした。C T Cは二十六日の晩一晚拒介になつて居るので、ホテルとは雲泥の差があるが、何よりもありがたいのは宿泊費が一日一キナと言う安さである。ホテルは食事を外食にして、素

泊りでも二十二キナ、日本円にして七千七百円もかゝるのでは、とても最後まで滞在する事は出来ないで、小竹氏と発熱で寝て居る学生一人を残して、全員C.T.C.に移動する事になり、移動日を明後日三十一日に決めました。

ギルワ陣地跡の収骨は、住民の阻止に逢い一応後日に譲って、やはり慰霊祭跡を重点的に発掘する事に最終決断を下し、午後は住民の言に惑わされない様に仕様と腹をく、りました。

それでも住民から、まことしやかな情報があれば、つい行って見たくなるのが人情で、その後も二ヶ所程情報に釣られて、行って見ましたが、大した成果も上らず、三十日以降は専ら集中的に慰霊祭跡の収骨作業に一貫しました。先の情報の一ヶ所はココロエゴローと言う地名で、カプラハンボとサナナダの中間のジャングル内で、到る処に濛の跡があり発掘して見ましたが、クレオソートの空瓶やリンゲル液のアンブルの破片や注射器等が見付かっただけで、既に収骨が行われた跡と思われましたが、それでも其処から三体の遺骨を収集する事が出来ました。

今一ヶ所は、慰霊祭跡のすぐ近くでありまして、此の辺り一帯の地名を「ジェンバゴロ」と言う事が始めて判りました。

此処でも、医薬容器や注射器の他に、カーバイトの使い残りや体重計等が発見されただけで遺骨は見付かりませんでした。

出土した物や、往時の記憶にある地理的關係位置等から、推測しますと、此の辺りは、嘗つての野戦病院の跡ではなからうかと推定されました。若しそうであるなら、一月二十日の夜、折しものスコールを衝いて、脱出を取行した地点に間違いなく、当時の病院には多くの死体や、行動不能な患者が沢山居た筈だから、丹念に探せば遺骨は必ず発見される、と不安の中にも、確信をもつようになりまし

た。度重なる現地人の頼りなきに、腹立ちと焦燥を覚えながら、此の日も成果上らず、三体の遺骨を収めて帰路につきました。

三十一日は休養日として、C.T.C.に移動し、設営を終って、終日休養を摂り、連日の疲れを取りました。

入国以来 現地人に振り回されながら、一週間が過ぎ、数えて見ると、収骨作業に当てる日数は後残り少なく、気はあせるばかりで、一向に成果が挙らず、此のま、で帰国する事にでもなれば、何んと申開きしてよいのか、顔向けも出来ず、全く申訳ない事になる、と心配すれど如何とも出来ず、只此の上は、運を天に任して、懸命に作業に励む以外に術はないと、心に思いました。九月に入って、一日休養で、体調を取戻した一行は、初心に帰り、気を取り直して、ジェンバゴローの収骨作業に全力を集中しました。

現地人は相変わらず、情報を提供して来ましたが、今までの体験に懲りて、一切耳を貸さない事にして、懸命の作業を続けました。

然し、作業は意の如く進まず、ある時は物凄いいスコールに見舞われ、倒木による危険な破目に陥り、作業を中止しなければならぬ日もありましたが、我々が重点作業地点と決めた慰霊祭跡に隣接したジャングルの大木の根元から、次々と発見され、一日には五体、二日に四体、三に四十九体、四日に四十体と、続々発掘されました。遺骨の発掘と同時に、水筒、飯盒、を始めとして、手榴弾、擲弾筒、弾、帯剣等も多数出土し、中でも帯革の止金が相当数見付かり、我々が予想した通り、多くの戦死者が、此の地点に集中して居る事を、如実に物語って居りました。

はるばる収骨に来た以上、一体でも多くの収骨を、どの願いが迷いとなり、空しい一日を過してしまい、何故初めから、此処を発掘しなかつたか、と悔まれてなりませんでした。

出発に当って、過去二回に亘って収骨事業

を経験された戦友会の後藤友作氏から、現地人の情報は当てになりませんから、良く気を付けるようにと、親切な助言を頂いて居りながら、それが現実となり、後悔と漸悔の念にかられましたが、後の祭り、取返しはつかない事でありました。

それでも後半、これだけの御遺骨が収骨出来、責任の一端を果した事、は、団員各位が、一体でも多くの収骨を、との執念のもとに、懸命の作業に当られた賜である事は、申すには及びませんが、収骨を終えて、静かに思いますが、戦後四十年近い年月、我々が迎えて来るのを、じつと我慢して待ち受け、「迎えて来て呉れたか、此処に居るぞ」と亡き戦友達の御霊に導かれた成果、ではなからうかと思われてなりません。

今回収骨した御遺骨は、その後ギルワ陣地跡で収骨した六体を合して一〇七体を確認したのでありますが、その殆んどは、地下十数厘のところから発掘されたものであり、亡くなれた当時のま、で、草むす屍となられた御遺骨であると想像されました。かつて、共に死なばと誓い合った仲でありながら、我が身に引替え、余りにも残酷すぎる現情に、一言の言葉も無く、只暗涙にむせぶばかりでありました。収骨した現場は、サゴ椰子の生茂る中を、藤葛が這いめぐり、二抱えも三抱えもある大木が空を蔽い、地上は太陽の光を遮られて薄暗く、朽ちた倒木が縦横に横たわって居る、無気味な、ジャングルでありました。

ギルワ河は、地図を見ますと、上流が大きく下流に当る陣地附近は、幾本かの小流に分れて、地下に浸透し、デルタ地帯と思われ、土地は異状に湿気が強く、遺骨の朽ち方は想像を絶するものがありました。

日程の都合で九月四日をもって、収骨作業を終了せざるを得ませんでした。生残った私達戦友会の、せめてもの償いと念願した、今回の収骨事業が、不本意ながらも、一〇七体

の収骨を確認された成果に、責任の一端を果たした嬉びを感じ、肩の軽くなるのを覚えました。

我々一行は、万全とは云えないかも知れませんが、団員一同「一体でも多く」を念頭に、懸命な作業を続けましたが、広範にわたる旧陣地内を、隅々探索する事は、到底不可能であり、今後の収骨に託して、残存遺骨がある事に、心を残し乍ら作業を打切りましたが、「俺も連れて帰って呉れえー」と言う声なき声が増えて来る思いが胸を締め付け、後髪を引かれ乍ら、ギルワを後に致しました。

焼香式 現地追悼式と予定の行事を無事終り帰国の途に就きましたが、今回の収骨事業が、国情民情が全く異なる国で、未開の蕃地特有の、厳しい自然環境に妨げられながら、困難な作業の連続でありました。一三十八年前、悲惨極まりない此の戦場で、共に死を誓い合った戦友達の、悲しい今の姿を、まざまざと此の目で見、痛々しい遺骨を抱いて帰国する団員の胸中は、在りし日の戦友達の雄姿を偲び、己れの身に引替え、余りにも大きく異なる境遇の差に、暗然として、ひたすれ英霊の冥福を念ずるばかりでありました。

南溟の蕃地に、瘴癘番雨の下補給なき戦士の連続に、人間生存の極限まで戦い抜き、祖国日本の栄光を信じつ、遣る方なき望郷の念にかられながら、無念の涙を吞んで、散華された戦友達が、今端の際まで念じて止まなかつたであろう、平和希求の願いが、ひしひしと身に迫るのであります。

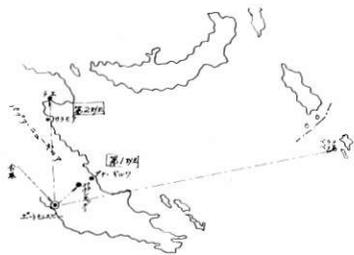
稿を終るに当り、私達、永年の願いを叶えて頂きました。厚生省、東部ニューギニア戦友会、四十一連隊戦友会の皆様には、並々ならぬ御協力を頂き、無事大任を果し得まして、ほんとうに、ありがとう御座居りました。厚く御礼申し上げます。 終り

東部ニューギニア遺骨収集団に参加して

旧歩兵第百〇二連隊 岡野宗五郎

戦後も既に三十五年にたり昭和四十四年、同四十八年の遺骨収集団派遣の際には収集協力力の為の基金その他で基友会の古川さん達と裏方として収集事業に協力致しました経緯はありましたが今回ベラベラ島の旧日本兵調査と同時に東部ニューギニア戦没者遺骨収集団が派遣されることとなり基友会(旧第五十一師團)の鈴木元明、岡本隆久さんから今次の収集地域はブナギルワ地区とラエサラモア地区になるので主たる作戦部隊であった旧歩兵第四十一連隊同第百〇二連隊戦友会より数名推薦されることになり第百〇二連隊から因らざるも私と吉成真一郎、師岡寛君の三名が参加することになりました。政府派遣遺団長には本峠和昭(厚生省援護局業務第一課)副団長には小竹唯夫第二班長高田忠男三氏が発表された。八月十日同十八日の両日援護局に於て、田中兼五郎副会長後藤事務局長等各代表が集り、行動日程その他に就て綿密な打合せ協議が行われました。尚収集団の編成及び行動区域は次の通りであります。

班別	厚生省	日本遺族会	戦友会	遺骨収集団	日本青年	計	担当地域
第1班(副団長 小竹唯夫)	1	4	(旧)7	3	3	15	ブナ、ギルワ地域
第2班(班長 高田忠男)	1	3	(旧)3	3	3	10	ラエ地域
計	2	7	10	6	6	25	



八月二十二日朝日新聞(朝刊)「ひと」の欄に本峠団長のプロフィールが掲載されそれを読みながら九段会館の結団式に臨んだ。結団式場には板垣参議院議員厚生省の関係者戦友会其の他多数御臨席の下にそれぞれ訓辞送別の言葉を承り、本峠団長の力強い出発挨拶等があり、終了後地下食堂に於て戦友会田中副会長基友会鈴木元明代表の外懐しい多数の戦友達が相集り、心のこもった壮行会を催され旅立ちの前にちよっぴり興奮したふん囲気となりました。団員は九段会館に宿泊した。

八月二十三日台風15号の通過にて飛行機の出発が心配されたが予定通り朝八時団員一同元気にバスにて成田空港に向った。雨は次第に晴れ空港に到着した頃は台風も房総沖に去り刻より少し遅れ十一時四十分頃CX500一便は香港に向けて成田空港を飛び立つたニューギニアの直行便は従来鹿児島から出て居ったが現在は直行便がなく香港・ポートモレスビーに変更されたので今回も香港廻りとなった。成田を出てしばらくすると「時計を二時間遅らせて下さい」とのアナウンスがあり機内食も運ばれ昼食をする。眼下には青く透き徹った海が広がり白い雲が点々と浮んで美しい眺めである。十五時過ぎには香港空港に無事到着した。空港ロビーで待機、次のニューギニア航空に乗る旨添乗員の白井さんから知らされた美しい香港の夜景を眺めながら市内のホテルに一泊する。翌二十四日丁度一昼夜遅れて二十一時過ぎ香港空港を離陸一路ニューギニアに向け直行する。ニューギニアは世界で二番目に大きな島で日本からは約五千キロ余離れて居り時差は一時間である。香港からのパプアニューギニア国営航空にはパプア人のスチワードが黄色やうぐいす色のドレス風のユニホームで機内食などをかきがいしく働いて居る姿は何んとなく懐しい感がある。

八月二十五日夜明けモレスビー空港に到着。成田空港や香港に比較すると灯もわびしげにとり人影もまばらで寒村の駅という感じである。空港には在パプア大使館の人達が迎えてくれ税関の調べもまあまあ簡単に済み、昭和三十一年一月ムッシュ島から故国に帰ってから二十数年振りニューギニアの地を踏む。気温は朝でも二十六、七度はあるようだ。ポートモレスビー空港で本峠団長のベラベラ島の調査班が第一の乗換便にて出発、続いて小竹班長のブナ・ギルワ班がポボンテッタに向けて出発する。私達第二班ラエ行きは一番遅れて十三時の便となる。空港には熱帯のギラギラする太陽にパプア・ニューギニアの国鳥である極楽鳥の赤い旗じるしが鮮かに映じ出されて居った。刻モレスビー空港を後にした飛行機は静かなオインスタンレーの山脈を眼下に一時間足らずで茶色に濁ったマールカム河口が見えて来た。今のラエ空港はまだ新しいとのこと、ラエは現在ニューギニア第一の都市で人口は約六万位あるとのことである。十四時過ぎラエ空港に無事着陸する。私達ラエ班は添乗員の白井さんを含め十一名である。戦争当時我部隊は昭和十八年一月ラバウルを第五十一師團先遣岡部支隊として出発ラエに上陸サラモアを経てワウ攻撃に向かったものであった。

今日空港にはドイツ系のホルグスネクト先生(モロベ研究所長)がジープで迎えに来てくれ以後何くれと親切にお世話になるのである。ホルグスネクト先生一家は戦争以前よりラエに居住牧師として亦大の親日家であり居宅には前回収集団の堀江参議院議員岡本隆久、毒島薫、鈴木正巳さん等亦懇話巡拝団の竹内茨城県知事其他多数の名刺や記録などが残されてあります。

食料品や収集器材等を準備したのであります。八月二十八日はホルグスネクト先生の計いで「ラエヨットクラブ」の舟艇の準備が出来たので私達は食料器材等を積み込み、その日の午後ラエ港を出発した。青い海を航行すること二時間余り夕陽の頃サラモアに着き、早速同部落の小さな小学校を借り数十年前振りに現地の飯盒炊きさんをする。遺族会や青年収骨団の若い人達がよく働いてくれる。そして少し遅い夕食を済まし各々故郷の話など語り合いながら土間に仮眠する。夜半雷鳴とともに激しい「スコール」に襲われる。昔中は痛い。翌日部落民の案内で半島に登る。高射砲弾地がジャングルの中に四門ありまだまだ戦場の傷跡がなまなましく同行したホルグスネクト先生の子息のマーチン少年は砲身に登り高射の手まねなどして戯れて楽しんで居た姿は何か感傷的であった。サラモアには三十一日迄逗留して師團第二野戦病院の開設された「ケラ」部落方面の収骨に当たった。前回の収骨団も来たのことにて労多くして効果は少かつた。部落民はカヌーなどで送迎してくれパプナ、ババイヤ等も馳走になった。

九月一日からは再び収集班の根拠地ノキリノキロッヂに戻りラエ近辺の現地人の情報に従いブンブ部落からオマル部落の奥のジャングルの山に登ったり亦十八年九月当時豪州軍降下部隊が降下した「ナザブ」草原附近等の厳しい収骨作業に従事した。九月三日朝五時ラエの空はまだ闇夜だノ私達十一人は昨日準備したジープと日本水産ラエ事務所長の本間健司氏の車に分乗して「ワウ」方面の収骨作業に出発する。マールカム河の白い大きな橋を渡る頃やつと熱帯の夜空も明るくなつて来た。「ワウ」は我が第百二連隊主力が岡岡連隊長指揮の下に死力を尽くして戦い朝倉中隊長は飛行場に突入したのであったが連合軍の猛烈な反撃に会い遂に後退を余儀なくされた激戦の地であり、今回は非とも行き度いが高田班長に願ひ出たところでありありますが急に天候も悪くなり「ワウ」を経て「ワウ」に到着したのは午後であり雨も降り出し町の警察に尋ねた基地は日本軍将兵の眠った墓地でなく一同落胆する。そして飛行場の側の小さな小高い丘には豪州軍

私達一行はトラックに分乗して宿舎キリンキロッヂに向った。このキリンキロッヂこそ私達ラエ地区収集班の根拠地的宿舎となりました。現在のラエの街は高層建築物はありませんが道路も広く舗装されて居り森の都と言った様な感じがする。市街地には立派なスーパーマーケットもありそれは確実な都市化を示して居ります。私達収集班もこのマーケットを利用し

の白い記念碑が建てて居り山には白い雲が棚引いていたく目に映じる。そして一路帰途についた。このところ毎日の様に悪天候が続き一日中雨が降る様になったので高田班長の指示で九月五日夜焼骨、六日午後現地追悼式を行い帰国準備することに決定し各々分担に従って準備をすすめ、降雨の合間を見ながら予定通り五日夜焼骨は完了出来た。

現地追悼式の場所はアンボ教区のラエ野戦病院跡でその草原に当時野戦病院付であった毒島薫さん建立した「平和の鐘」の小さな碑が埋め込れていた。六日は幸に雨も上り熱い日照りに「東部ニューギニア戦没者の霊の真新しい塔婆が建てられ供物をそなえ団員も各々御遺族や団体からあづかった手紙、米、酒、菓子たばこ等を供え、そして団員が集めた草花などで飾り白井さんの司祭で式を始める。線香の煙がもうもうと立ちのぼる中で高田班長が政府派遣団代表として慰霊の祭文を述べ、続いて遺族会田中さんが追憶の言葉を、戦友会代表して私が「戦友慰霊の皆さんいっしょに故国に帰りましょう」と言葉を結んで感激も新にして追悼式を終了した。式場には今回の収骨作業に終始何かとお世話を受けたホルズグネクト先生シスターのパウラウウコさん外現地人も沢山見守つてくれ涙をこぼして握手をしてくれる人もあった。

現地追悼式の公式行事が終った後に雨がポツポツ降り出して来たが、私達吉成、師岡の三人で連合軍戦没者墓地にお参りした。広い芝生の真中に白い十字の塔が建てて居り芝生の墓地には小さな墓誌が整然と並んで居り静かな墓地を取り囲むように大きな樹々が天まで伸び名も知らぬ鳥が飛び交って居た。

翌日は団員も朝からお土産の民芸品などを買い集め故郷を偲んで居るようであった。食に飢えマラリヤに悩まされ幾度か死線を往来した者にとつて過ぎ去った昔日を想い出し異国の地に眠る戦友英霊の御冥福を念じつつ帰国の日も迫った九月八日、数日住み馴れたキリンキロッヂを後にした。

現在の平和な世の中がいつまでも続くよう祈るのは私のみではなかった。さようならエの白い雲!! 収骨の旅は終った。

ニューギニア慰霊の旅を終えて

遺族 國田正雄

(一)ウエワクにて

昭和十八年から二十年にかけ多くの日本人がこの地で歿した。川越市で百七十一名、その中には私の教え子と弟など忘れぬ青年が十九名いる。二月下旬の出発前後、私は近くの寺に回向を頼み英霊の氏名を消書してニューギニアに出発した。全国各地からの遺族代表約五十名は、米、酒、水、餅、握飯、煙草、菓子類を持参している。私はこの地に造花ではあるが、菜の花、あやめ、菊など日本の花を準備した。ろうそく、線香は申すまでもない。懇意なお寺の住職からは高価な珠数をいただいた。

派遣団はモレスビーに一泊、翌早朝ウエワクに飛んだ。朝食もとらぬ慌ただしさであった。ウエワクを基地にして班毎の巡拝となるのである。夜半よりは雨音烈し野に伏せし はらからを偲びねがえりをうつ

気温三十二度、夜は少しさがる雨季であり思ったよりは凌ぎ易い。然し食糧弾丸共に無く制空権も握られての当時では、凌ぎ易いどころではない。雨音を耳に眠れなかった。

砲身のさびにふれにき鋼鉄のぬくきは同胞のはだの如きも

松岬の海に向つて高角砲一門、海に向つてさびていた。砲身に手をふれて、私はしばらく無言だった。一発撃つて奥地に退いたともきいた。骨とも思ふ珊瑚の細片を袋に入れた。

石の墓に夏の陽きびし日の丸のはためきは兵の声の如きも

阿部岬に政府建立という慰霊の碑があり、ここで合同慰霊祭を執行、快晴青空を背の日の丸に海の風があたり、旗はなりつづけた。合掌に応える英霊の声ときいたのは私だけであるまい。

手榴弾も銃剣もさびぬ碑の上の甲にふれぬさびの手ざわり

洋展台は日本軍人が遙かに日本を望んだ台地の名称。ここに英霊碑があり、その上や周囲に銃剣、鉄甲、手榴弾があった。私は鉄甲にふれた。この甲をかぶつた兵は、この近くで戦死したのかも知れない。正面と側面に弾丸が貫通している。英霊碑には「第十八軍直轄部隊、第二十師団、第五十一師団、各参加部隊」と刻んであった。皆それぞれに合掌黙祷。思い思いの品を供えた。

弾丸も無く一升五合の米をわち七十日余を戦いしという

モレスビーからウエワクに向う途中、マダシ人にこの話をきいた。マダシはウエワクとラエの中間地点である。機上より英霊の冥福を祈る。同行のひとたちの供えたものが日本より持参の食品であったことで、誰も同じ思いであることがわかる。

(二)ポイキンにて

ポイキン方面戦歿者遺族達に松尾喜次郎氏が案内となり第九〇兵站病院跡を尋ねた。ようやく探し求めたポイキン川右岸では、道路の端に一メートル程の朽ちかけた角の墓標らしいものに気がついた。かけよると日本軍慰霊と墨書され、周囲につまらぬ石には草が生い茂っていた。厚生省高野氏の話では数年前の遺骨収集団の細かい骨の埋葬地であるとのこと。一時は皆言葉もなかったが、誰いともなく墓標にかけより雑草を除き、石のいくつかを積み加えた。そして思い思いの品を供え始め、ろうそく、線香に点火。私は墓標の上に日本酒を注ぎ、私も幾口か飲んだ。弟や教え子と一緒にいるという心であった。それから落花生、するめ等供え合掌した。皆無言、現地の人もほとんど無言だった。

ここから三十メートルにポイキン川が流れていて海に注いでいる。このあたり傷病に悩む英霊たちが祖国を偲びつ、戦闘にあけくれたのであろうと思う。

線香を空に投げれば煙をひきつポイキン川に音もなく歿す

合掌の後、線香一束に点火空に散華した英霊にと、けと空に投げた。煙の尾をひきつ、線香は川に落ちた。この川が流れこむ海にも多くの英霊が眠る。私は河口に向い合掌をした。

橋もなきポイキン川の土人道を のぼればここが兵站病院の跡は

案内にたつ松尾氏は軽装地下足袋で地図を手に、現地人に尋ねながら土人道を行く。水溜りの傾斜地を滑りながら千メートルも上ったかと思うポイキン川左岸に少しばかりの平坦地があり、周囲の状況と併せて、兵站跡は此所と推定した。悪戦苦闘、祖国を守護しようとして身を捧げた英霊各位に、持参の品を供え合掌黙祷、しばらくは無言であった。

爆弾の跡なお残る凹地あり、夫を呼びつ土人道を降りる

ようやく目的を達した私は山に向つて弟の名を呼んだ。同行の箕輪さん、上原さんも、ここで散華された夫の名を呼び「家族の心配はありませんよ、お父さん」と叫んだ。このあたり大きな凹地が多く、同行の誰かがまだ三十数年前の爆弾の跡が残っているの聞いて来たというので、凹地はそれかと思いつ、土人道をおりた。

宿舎に帰ってから、日誌に書きつける時、この歌を口ずさんだら、何人かが後で下さいと言うので色紙に清書して郵送した。

(三)ポイキンの人たち

兵站病院跡には何も残ってはいなかったが土人道の往復には蛮刀をさげた少年達が後からついて来てくれた。そしてポイキン村で思いがけない人に出あった。キャプテンのカミロスという五十才だという男だ。

別行動の班を待つ間、時間の余裕ができたので私達はポイキン村で昼食をとり、彼らと話しこみ写真撮影もした。はじめ子供たちが出て来た。片言の英語と手振りであうう

巡 拝 の 記

歩兵第八十連隊朝鮮第二〇五五部隊
沢村隊「北田薫」昭和十八年十二月二十日
東部ニューギニア「ガリ」に於て戦死 義妹 北 田 貞 子

ちにかミロスがやつて来た。彼は最年長者と思われた。彼の子供たちと笑い興じている私に、「アシイタイ、スワレ、ミル」などと意外な日本語ではないか。そのうちに「ウタ」を歌うという。椰子の倒木に腰かけて彼は歌った。「モシ、モシ、カメヨ」そして正確に「ミヨ、トウカイノ、ソラアケテ」と一番の歌詞をほぼ正確にうたってくれた。終わると私一人を、彼の家に案内してくれた。そして「ケイレイ」「ゴクロウサマデ」というのであった。どうやら兵站病院で炊事の手伝いでもしていたらしい。三十年前の思い出が彼の脳裡をゆきまきしているのではあるまいか。多くの兵達と生活をした経験が、今私達を見て蘇がえったのであろう。感慨無量であった。◎いたつきのいたでに悩むますらおを 診とりし人もまた逝きにけり

同行の一人は箕輪勝(軍医、ボイキンに於いて戦死という)英霊の奥様である。この地にあつて数多くの戦傷病兵の診察予療に専念しつゝ、悪条件の中で戦死をとげられたときいて、口にしたのがこの短歌である。

(四)日本に帰つて

帰国して数日後、私は近藤努氏(会社社長)を尋ね中飛行場の写真をお目につけた。滑走路だと彼はいくエウク空港の状況について昔を話してくれた。私も行きたいと言い唯一の土産品現地の草煙草に火をつけてくれた。また出発の前日、病院事務長山本氏は、セレバス上空を飛ぶのかといった。彼も亦イリアン、セレバス方面に思い出多き軍人だったのである。このような話はいくつもあつた。

中学校長で退職した年、私は英霊となつた教え子の墓参を終えた。そして今回はニューギニア各地を慰霊の為に旅した。教え子達は若い姿のまま私の中に生きている。護国の一念に生き、死んでいった英霊たち、その献身の尊さに応えたい。これが私の考えである。

退職した日、私はまた教職についた。高校生を前に英霊の思い出を語る日もあるが、「靖国神社で先生」この言葉を忘れえない。(丁)

昨年五月夫昇天し亡き人を偲ぶ切なきを痛感しておりました頃遺族会の会長様のお誘いを受けました。戦死いたしました義兄には三人の姉がおりますがいろいろ高令のため参加出来ずニューギニアの国情故に私の参加については姉たちから心配のあまり参加を見送る様に反対を受けました。迷ひの日々墓前にぬかづき義兄と亡き夫の導きを感じ不安ながら勇気をふるって参加させていただきました。

厚生省より許可を頂き、家族の人々の暖かい心へ送られ感謝の内に三月二十六日大阪を発つこととなりました。

巡拝の旅の折々は拙ない歌に託させていただきます。

身も魂も浄め尽して出でゆかん
義兄散華の地 巡拝の旅
極楽鳥亡き人偲ぶ心せて
雪の福岡 今し飛び立つ
ニューギニア近く空に蓮華雲
浮びみ霊の お迎えと祈る
貴くも若き生命を捧げまし
みどりの大地 心して踏む
暮れなずむ海は七色空に溶け
今し夕日は 島の端に入る
肌の色黒く輝く人々の
笑顔に通う 温かきもの
ロビーにて再度寄り来る大きな蝶
迎えるごとく 吾が足もとに
神と呼び佛と讃え巡りたり
椰子の林を 風ぎし海辺を
ニューギニア遺骨抱きたる山々や
十幾万のみ霊いづこ
遙けくも故国を望むこの浜に
立ちませし 義兄の思いやいかに
抱きつつ持ちて帰らん義兄達の
歩み給いし この岡の石(マララにて)
大砲は砲口海を見すえつつ
赤赤と錆び 草原に立つ

戦いの跡を止むる船半ば
朽ちて無念を 波に洗うや
眼り得ぬ思いこもりし一夜なれ
み霊偲びて 通夜となきまなれ
やさしみの溢るホテルや涼しげに
朝のロビーに 花満たさるる(マダンホテル)
ひた走るトラック荷台にしがみつ
激戦ありし奥地慰霊に
カムロワの村のはづれの碑のもとに
日の丸か、げ 合同慰霊祭
お供えの品々すべて故国より
はるばる持ちし 霊よ召しませ
遥けくも散華の山を望みつつ
涙溢れて 今御供養を
ジバパネン 激戦のあと偲びつつ
最後の慰霊 捧げたる山
蟬ぐれ森の鳥達一せいに
啼くはみ霊の 悦び伝うや

巡拝慰霊を終えアナン岬を望み浜に立ちよ
り汗を入れました。米軍上陸の浜一夜にして
山の木々は一本も残らなかつたそうです。か
つての激しかった戦いの跡かたも見えず空も海
も麗わしく澄んでいます。海は七色に深く深
く又白く沖合に波しぶきが見られます。

浜辺の木かげに長々と綱を干し縫う現地の
人達の姿閑かさに満ちております。海につき出
した一本椰子の根方に私達二班全員十二名揃
つて記念の写真、まぶしさをこらえつつパチリ
パチリそれぞれシャッターを現地の人に押し
てもらい心細める一ときとなりませし。砂浜で
小さなサンゴのかけらを拾い再びトラックに
乗せて頂きフィッシュハーヘンへと空港の前の木
蔭で五十分間待て草の上に両足を伸ばし美し
い空を見つめ、めづらしい鳥の囀りピンクや白
のブルメリヤの花を眺めて、すっかり疲れも取
れました。文章は苦手後は又拙ない歌に託します。

仰ぎ見る思ひは一つ十字星
夫子兄弟 霊よ安かれ

友偲び歌います声温かく
涙と共に 聞きつ歌いつ
祈りこめ思ひこもりし歌声の
遠くガリまで 届くを祈る
義兄達の進み給ひし御最後の
道は定かにわからぬまゝ、に
遥かなるサワラケットの嶮しきを
越えて「ガリ」へと行き給ひしや
十字架の苦しみ凌ぐ道なりき
高き使命を、生きませし日よ
再びを命、の苦難を踏むなかれ
み霊らの声 肝に銘じし
今は早や高きみくにに淨き座に
なれど祖国に 帰り来ませと
帰国する朝にただき椰子の水
忘れ得ぬ味 あお甘き味
不可視なるみ霊に通う定かさを
魂にひしひし 感じたる旅

みどり濃き大自然、現地の人々の明るい笑顔
を後に霊安かれと祈りつつ一路帰国致しまし
た。旅のつれづれの写真を添え義兄の姉達に
報告いたしました。後日カズエ姉さんより次
の様な心温まる一文を頂きました。

貞子様

はるばると遠い異国へようこそ行つて
こられました。本当に有難う。異国の
果て「ガリ」とやらの山深く淋しく眠るあ
の人も何十年振りか初めて家族の訪
れを受けて定めし満足したことではし
ょう。今まで彼の地の様子など何一つ偲
ぶよすががないままに、いつしか四十年
近くもの年月が流れ遠い昔の人となり
ましたが色々と思ひ巡らす時唯々胸も痛
みましたが今具さに現地の様子を目の当
りに見て山々の姿形や石ころにも見もや
らぬあれし日の数々が偲ばれて霊よ永久
に安かれと只管に冥福を祈るばかりです。

カズエ

巡拝の節には多くの方々の御愛念に包まれ
本当に有難うございました。生涯忘れ得ぬ悦
びとなつて私の胸に輝き続けることと思いま
す。厚くあつく御礼を申し上げます。 合掌
浄らかなことのみ多き巡拝の
旅はみ霊の 御加護のもとに

海竜島回想

第八軍需部ウエワク支部

海軍 滝沢豊四郎

昭和十八年三月が我が部隊は横須賀にて編成され、四月五日、桑港丸に便乗して出港した。我々の前に一次、二次と二つの船団が出たが、いずれも大島沖、九州沖でボカ沈され失敗に終っていた。我々は第三次の船団であった。桑港丸の外六隻の輸送船は、駆逐艦一隻、駆潜艇二隻、飛行機三機に護られ九州沖まで来たが、これより先は、飛行機も駆潜艇も帰り、護衛艦は駆潜艇二隻だけとなり、ジグザジ航路を取り、敵潜を警戒しながらパラオに向う。無事にパラオ島に寄港し、桑港丸は仲間の船と別れ、愈々戦況悪化しつつ、ある南太平洋上へと単独航行となった。

桑港丸の装備は、八厘砲一門、高射機関銃一挺、爆雷十個、心細さは此の上もなかった。積荷は、武器弾薬、機雷、各種燃料、食糧、被服、大型電波探知機、発雷機、自動車、大発二隻、海竜島に砲台を築造するため十二厘二門を積んでいた。

二回に亘る失敗に、此の船が着かなかつた。作戦上大打撃を蒙つて了う。どうか無事にあつてくれと、誰もが神に祈つていた事である。神のお加護があつてか無事赤道も越え、油を流したような静かな海を滑るように、五月一日未明、三時半頃海竜島教会前棧橋五百米沖合に錨を下した。乗船員一同は、長い航海を終え無事に着いた事を喜んだ。先に来た海軍中佐宮沢寛辰部隊長以下、五島大尉、中村、遠藤両兵曹長等の喜びは一八であつたろう。

朝食後、全員上陸し、ひと休憩した後、七千艘の船の戦斗荷役が開始された。現住民達も荷揚げに大変協力して呉れた。自分は副班長で、大発に乗り物資を本船から陸上へ運ぶ運搬係だつた。太陽は容赦なく照りつけ四十度を超す暑さ、鉄板は焼けて火傷する程である。汗も出切って、顔面を撫でれば塩がジョリジョリと吹いている。くらくらと目が眩み、

全く灼熱地獄だ。それでも皆必死になつて頑張る。敵機に発見され爆撃されたら海の藻屑となつて了うから夢中だ。一日の作業が終了陸に上つた時は、無事に済んだと全くほつとした。

それから四日目を迎えた。今日も容赦なく照りつける太陽、連日の暑さと、きつい荷役に皆バテ気味であつた。その日の作業止め三十分位前の事であつた。防空隊見張山の警鐘が突然ガンガン鳴り出した。それ空襲だ。ウエワク上空より真黒く何百機とも知れぬ敵機が此方に向つて来るではないか。自分達の大発は、本船から荷を卸して積んでいる最中であつた。艇長が「早く舳を解けえ」の号令を下す。手早く航を外した。「大発を本船から離せ」「面舵一杯」「全速、敵機の真下に前進」次々と命令が下された。全員の顔色は青黄く、唇は土気色となり、緊張の余り顔面は硬張り、目玉だけギョロギョロと光っていた。

敵機は次第に近づいて来る。よく見れば三機だ。今迄何百機にも見えたのは、ウエワクの防空隊が射ち上げた高射砲の弾幕だつた。真黒なでつかい凶体をした空の怪物のようなボーイングだ、編隊を組んで来ると栗の毬のようなもので、ちよつとやそつとでは歯が立たないと言ふ奴だ。「敵機の下へなど突込んで大丈夫ですか」と聞くと、艇長は「あ、大丈夫だとも、奴っこさん、下には機銃がないから安心だ」と平気な顔で言っている。戦争なれした者と始めて戦争に来た者とは、こうも違ふものかとつくづく思った。バカラム防空陣地、警備隊陣地、水上基地陣地、桑港丸の機銃が一斉にダダ……と火を吐き白く曳光弾が尾を引いて敵機に吸い込まれて行く。空の怪物から何やらピカリと夕日に輝き光つた物体があつた。「あつ爆弾だ」自分達に向つて落ちて来た。これで俺達はお陀仏かと本能的に頭を抑え伏せた。ガードか、ザードか、物

凄い音を立て、頭に近く落下して来た。思わぬ上を見た途端、大発の上をガールと通過した。「あつ、本船が危い」と云う間に、「ガガイン」と大音響と共に命中した爆風で大発が転がり返るかと思ふ程の大ショックを受けた。赤だが黄だか分らない閃光と共にモーモと立ち昇る硝煙に包まれ本船は見えなくなつて了つた。「ああーやられた」と互に咬いた其の時、艇長は「大発を本船に付けろ」と命令した。「大丈夫ですか、そんな事して」「大丈夫、大丈夫、あの飛行機が今一度爆撃をするには一旋回して来なければ出来ない、それには十分かゝる。それ迄にはどうなつか見えて来るのだ。取り舵一杯」と命令して、大発は大きく輪を描いて本船に近づいた。硝煙が消えるにしたがつて船がはつきり見えて来た。今迄船の右舷で筏を組んでいた五、六人の者が筏諸共吹飛ばされて影も形も無くなつている。タラップの所が甲板の上から架装掛けに水際迄バックリと大きく口を開け、タラップがぶらりと宙に浮いており艦の方は、一面蜂の巣のように穴をあけられ、ハッチの中まで見通しが出来た。これはひどくやられたわい。船橋の上を見ると、宮沢部隊長は双眼鏡を片手に、爆撃の前も今も一歩も動かさず指揮をとつておられた。流石に部隊長だと感心した。船に近づくと船から声が掛つた。船内には怪我が多勢出たから大発で陸に運んで呉れ」と早速船に大発の舳を継いだ。ウインチで次々と負傷者が畳の上に乗せられて大発に降して来た。手をとられた者、背中をバックリと大きく抉られた者、目と目の間、鼻を抉られ呼吸をする度にブクブクと血の泡が吹き出している者、足の付根から切られ、ほんの肉と皮が少しついていてだけでぶら下つており、感覚が無いらしく「俺の足をこちらちへよこして呉れ、おおい、俺の足をこちらへよこして呉れよ」と力なく叫んでいる者、首が何処かへ吹飛ばされた者、船槽の中は血の海で目を覆うわんばかりの有様だ。全く一瞬にして阿修羅地獄と化した了つた。ニューア映画や戦争映画では見た事があつたが、実際に直面したのはこれが始めてである。戦争に残酷なものだと思つて了つた。敵機は

戦果を挙げたとばかり、ゆうゆうと頭の上を過ぎ引揚げて行つた。怪我人を陸に運び応急手当をした後、ウエワクの野戦病院に送つたが重傷者は到底助かるまい。可哀想に。桑港丸は応急修理の後、夜パラオへ引揚げて行つた。無事帰る事を祈つた。日はとつぷりと暮れて行く、あ、今日くらい長い一日を感じた事はなかつた。草叢に鳴く虫の音も今日はなぜか寂しく悲しげに聞えて来る。

愈々十八年五月五日より軍需部としての業務開始された。当時の海竜島の様子を紹介して見よう。ウエワク沖合三十軒程の所にある伊豆大島のように大きな山からなる島で、目の前にはムシ島、横にはカラサイ島等があり、海竜島は元ドイツの潜水艦基地だつたそうだ。山間に流れる水は清く、海の幸は多く、野菜の育ちも良く、海辺には野天の温泉が湧き出るところもあり、誠に安住の地である。島の玄関口バカラムには棧橋があり、其の際には十時もある水道管が二本もあり、船に水を補給するようになつていた。此処に在る教会を医務室に使用、学校もあつたが軍用倉庫として使用した。入江は下駄履、二枚羽根の水上偵察機の基地になつており、医務室前の海岸線に沿つた椰子林の中には航空隊の宿舎が点在しており、バカラム広場から左に行けば道路の左側に警備隊本部が海と空に睨みをきかしている。背後の山脈には防空隊機関銃陣地、川を渡ると東北振興会社の加工場で、めじ鮪や鯉の生り節をつくつていた。更に進むと軍需部の構内に入り、海岸の椰子林の中には宿舎が並んでいて、道路を進めば川端に冷蔵倉庫があり、東北振興が獲つて来た魚や肉を保管し各部に配給していた。少し行き丁字路を左に折れると軍需部本部。本道を進むと八建設山中隊伐採班や製材所があり、更に進み川を渡ると広々とした所に出る。三井農林会社の農場だ。山の斜面には教会があり、大きな建物が見える。島の東端の高台には十二厘の砲台を築き、防備を固めていた。ムシ島では台湾農業義勇隊により大農場がつくられ、生鮮野菜を軍に供給していた。

ある日の昼下り、水上機が偵察飛行から帰

り着水しようとした時、グラマンの奴、何処から現われたか、ダダ……と銃撃して来た。水上機は交わす間もなく落されて了った。その時運悪く陸軍の舟艇が偶々海竜島に寄港していたが、満載の兵隊が暑いので甲板上に出た所をバリバリと機銃掃射をうけ、まるで将棋が倒れるようにやられ、目の前で大勢が戦死した。ところが敵機は、我が方の機銃陣地を知らず低空飛行したため、防空隊の陣地からの一斉水平射撃をうける。よく当りブスブスと孔が開く。其の中にボアツと煙を吹いて遂落した。ある夜、敵潜水艦が出たと云うので水上機が出撃して飛び立った。ところが停泊中の貨物船の二本マストに激突して海に墜落して了った。中尉は負傷して入院。又波が高い日、空輸して来た水上機が着水に失敗し海の藻屑と化した。戦かわずして、なけなしの飛行機を海に沈めて了うとは勿体無い話だ。

十八年八月の十七日、ウエワク、ブーツの両飛行場が敵戦爆連合機の奇襲大爆撃に因り潰滅的大損害を蒙ったのである。夜間爆撃も毎夜のように来るようになった。ブーツ方面の山間から、スパイがおるらしく、毎夜のように狼煙火花を打ち上げて手引をしていた。愈々ウエワク、ブーツには我が軍の飛行機が無くなって来た。夜ともなれば大艇機や魚雷艇の銃撃もうけるようになって来た。

九艦隊の旗艦白鷹が入港したり、パラオやマカツサルから物資を積んだ船が六、七月頃は度々入港して海竜島は活気溢れ、其の頃が華であった。十八年の末頃ともなると駆潜艇で物資を運んで来るようになり、愈々淋しくなつて来た。

十九年一月に入ると海竜島の爆撃が激しくなつた。海竜島にもスパイがいるのか、九艦隊の司令部がウエワクから移つて来た途端に爆撃が物凄く激しくなり、島はハゲ山と化して了った。機雷等を格納する隊道を、朝鮮労働者を使い、山のあちこちに掘っているのを、要塞でも築いているとも思つてか、大型爆弾を投下して来た。艦船は来ないし、大発も運航出来ない状態では、軍需部の機能も、岡に上つた河童で役に立たなくなつて了つたので、十九年三月二十一日を以てホーランヂヤに向け転進するよう命令が出た。

本土に渡つた我々は、其処でも爆撃に追われて、飲まず喰わずで歩き続けた。海竜島のように時代が懐しく思い出されたが、その海竜島も、海の向うで猛爆撃をうけ、もうもうと砂煙を上げて居る。防空隊、警備隊、軍需部のあたりはすっかり緑がなくなり、見る影も無い有様と化し、今日も亦幾人か、戦死しただろうと思うと悲しさが込み上げて来る。これから先の戦況の行末を思うにつけ不安でななかつた。

初太郎さま、永い間の念願がなつてやつと貴郎の散華したニューギニアの地に墓参に参りました。ほんとうに遅くなつて御免なさいね。貴郎を築港の第三突堤に御見送りして早や四十年、永い年月でしたね。私もこんなにおばあさんになつてしまいました。永い間ほんとうに淋

亡き夫、初太郎様へ

遺族 岡本利子

この月を眺めているのか知ら、山や海を見ては何処で戦っているのやらと思わぬ日は一日とてありませんでした。それなのにそれなのにニューギニアの地にて若い命を散らしていったとは……

戦死の公報が入つても靖国の妻と云う名の下に人前で泣く事も許されず二人の子供を抱えて明日の生活の心配をした私でした。幸福だった娘時代、学校を卒業してすぐ結婚して三年二ヶ月の結婚生活に何一つ技術を身につけるでは無し、何も出来ない私でした。頼りにしていた母も貴郎の出征後あとを追う様に亡り、貴郎無き後の私達母子三人は嵐の中の木の葉の如くあちらの岩にぶつかつたり、こちらの岸に突き当り、ある時は押し流れそうになりました。わけても清をおんぶして美智子の手をひいて雨の日も雪の日も授産場通いをした時、一寸も外で遊ぶ事をせず「お母ちゃん帰ろう帰ろう」とミシンを踏み私の側を離れず私を泣かせた美智子も四十二才清も四十才になり、二人ともそれぞれ二人の子供の親となり幸福に暮らしています。美智子の小学校入学の時にはカバンを買つてや事も出来ない為、私のコートをつづつてランドセル、紙バサミ、草履袋を手製で作つてやつた時、先生が「美智子ちゃんのカバンが一番良いね」と励まして下さつた山本先生春夏秋冬の学校休みには必ずアルバイトして家計を助けてくれた優しい子供達でした。今で云うカギツ子にもかかわらずよく素直にぐれもせず育つてくれた事は常任坐臥その辺りを離れずの教通り貴郎は何時も私の側に居て御守護いただいているお蔭と感謝しています。子供達の励まし、又宗教に救われなかつたら私はきつと地獄の道を歩んでいたと思ひます。疎開先から帰つて焼き出され残つたものは二人の子供と御先祖様の御位牌だけで唯呆然とするのみでした。淋しいに付け悲しいに付け、子供の大病、小中高校の入学、卒業、就職、結婚、孫の出産と折節の喜びや悲しみ、御仏前に座りよく話しましたね。でも住む家なく、働こうに職なく、母子寮にも男児が中学生であるために断られ、美智子の

就職の折には両親が揃つていない為、一流商社、銀行は受験を許してくれませんでした。銃後の事は心配するなど出征兵士に心強い銭別の言葉を送り乍ら戦死者の遺族に当時ほどの様な援護の手が差しのべられたでしょう。私は世を怨み国を怨みました。人を怨み、もつたない事ではあります。申訳ありません。その時に教えていただいた先祖供養の尊さ、自らの因縁、業障、懺悔の尊い教を聞いて素直に行じさせていただけの私になりました。今では朝夕に懺悔滅罪徳行法と感謝の日々を送らせていただきほんとうに幸福な日々を喜ばせていただいております。たつた一度夢枕にたつたあなた子供を抱いて私は何処よんでも答えずスツと消えてしまつたあなた思えばあの時にあなたは亡くなつて逢いに帰つて来たのではと……

異国の地で病に斃れたか餓死されたのか、さぞ苦しかったでしょう。残念だつたでしょうね。死者に対する錢けの名譽の戦死とは言い乍らあなたの苦しかつた御心を察するとき、肺腑えぐられる思いです。さぞ故郷へ帰りたいかたでしようね。月を眺めては貴郎はどここの地

靖国の宮に御霊は鎮まるも
折々帰れ妻の夢路に

歌にもある様に、夢にでも逢いに来て欲しいと何処思つても一寸も逢いに来てくれませんでしたね。こんどの墓参には内地から白いお米を持つて来ました。何十年振りに白い御飯をいただきますよ。内地から水も持つて来ました。御酒もビールもタバコもスルメも存分には持つて来ましたが皆懐かしい日本から持つて来ました。あなたの遺骨は帰つて来ませんでした。でも四十年たつた今、土にかえつたあなた。ニューギニアの土を遺骨と思ひ、私と一緒に帰りましょうね、子供達や孫達、又肉身や戦友の待つ懐かしい故国日本へ……

慰霊参拝して、心の重荷をおろした様な気が致します。白鳥の恩は黒鳥に報ずべし私もこれから皆様のお役に立つ人間になりたいと思つております。そして命ある限りあなたの菩提を弔つて生きて行きます。何卒安らかに御成仏あらん事を祈りつ、。

昭和三十六年三月五日
初太郎様 利子 令營

